

白田町埋蔵文化財調査報告書第3集

五靈西拾式号古墳

——佐久平南限最終末期群集墳の調査——

昭和 63 年 3 月

長野県南佐久郡白田町教育委員会

卷頭図版



1. 五靈西12号古墳石室内全景



2. 鉄鎌・銅帶具出土状態

序

臼田町教育委員会
教育長 三石 善夫

このたび臼田町農道整備関連事業を実施するにあたり五雲西古墳の緊急発掘調査を昭和61年3月3日から3月20日にかけて行った。

入澤古墳群は入澤部落の中心を東西に流れる谷川（県一級河川）にそって、南面と北面の山麓に遺跡と共に多い。この五雲西古墳は、北側の南斜面にあり、古くから土偶や石斧、石棒などの出土品が多い月夜平遺跡（古墳）は対岸の南側丘陵地帯である。

入澤古墳群は19基あるが、古墳群を初めて学術的に調査を行い、その一部を解明することができたことは意義深い。奈良時代～平安時代における遺物が出土し、平安時代まで追葬されていたことが判明された。

人骨の出土量も多く、火葬と土葬の判別も明かになった、またとりわけ、鈎帯（かたい）の金具（銅製）が出土し、五位以下の役人が用いていたもので、そうした人物がいたことを証明している。鈎帯は古くから北アジアおよび中国で行われた帯の一種であり、日本では古墳時代にその制を受け、豪族がこれを巻いたとみえ、帶そのものは朽ちてしまっている。

古くは金銅製で竜文や忍冬文などを透彫したもののが用いられていたが、奈良時代から平安時代になると、これを用いる人々の数がふえてきた。公卿は金銀のものをもちいていた。五位以下のものは銅製を普通とし透彫の装飾もなく形も形式化したものが用いられるようになったといわれている。

古墳の外部は、耕作等により破壊されていたが、石室と内部はほぼ原形を保っており付近より産出する溶結凝灰岩（佐久石）を石材として使用していた。とりわけ奥壁が一枚の石で作られていたことは、豊富に産出する原産地ならではの築造である。

このたびの調査が古代の生活と文化を悠久の時を越えて現代に繋ぐ役割りをするものである。

また、発掘調査にあたり、入澤地区の方々、地元の佐久考古学会の皆さんからご指導とご協力をいただきました。さらに佐久総合病院の先生方並びに、南佐久郡誌刊行会から考古編常任編纂委員の島田恵子氏を派遣していただき、発掘調査と報告書作成にご尽力いただいたことに対し、心から感謝申し上げる次第である。

昭和62年（1987）10月

例　　言

1. 本書は、長野県南佐久郡臼田町大字入沢1696番地に所在する五雲西12号古墳の調査報告書である。
2. 本調査は、新地域農業生産総合振興対策事業（果樹产地総合整備）による農道整備で五雲西12号古墳が破壊される事態となったため、臼田町教育委員会が昭和61年3月3日～20日にわたって発掘調査を実施した。
3. 本調査は、別記（1ページ）発掘調査団を中心になり実施した。
4. 報告書作成のための整理作業分担は、以下の通りである。

現場遺構実測図作成——佐藤敏・三石延雄・島田恵子・佐々木春藏・岩松英明・榎原貞雄・井出正義

現場地形全体図作成——草間好文・三浦英敏・小山俊明（臼田町農政課技師）

報告書遺構実測図の整理・トレース——島田恵子

遺物の洗浄・註記・接合——三石延雄・島田恵子

土器・鉄器の実測・トレース——島田恵子

図版作成——島田恵子

5. 本書に掲載した遺構の写真は、島田が撮影したものを使用した。出土遺物の撮影は、由井正氏（龍岡城保存会相談役）に御協力いただいた。

6. 本書における遺構実測図・遺物実測図の縮尺は、各図中に明記してある。

7. 図版中遺物の縮尺は、鉄器・銅器・土器3分の1とした。図版中では土器・鉄器の番号を簡略した。例えば第11図1は11-1と表す。

8. 本書の執筆は、文責を文末に明記した。

出土した骨・齒の鑑定および原稿執筆は、佐久総合病院整形外科町田拓也医長、口腔外科三沢常美医長に御協力賜った。

9. 本書の編集は島田が行い、三石延雄団長・井出正義担当者が監修した。

10. 本遺跡の資料は、臼田町教育委員会の責任下に保管されて、臼田町文化センター（北原佐久生館長）に展示してある。見学・活用されたい。

調査にあたり、地主の横森覚、岩松昭、長田俊一郎氏にあたたかいご理解をいただき、入沢地区的三石甲子郎、日向義治、日向秀明、岩松吉次、岩松昭二、岩松今朝市氏、議会議員の岩松剛助氏、文化財調査委員長の榎原太郎氏には調査期間中大変御世話になりました。ご芳名を記して厚くお礼申し上げます。報告書作成において佐久総合病院医療ソーシャルワーカーの若月健一氏に種々ご配慮いただき感謝申し上げます。

本文目次

題字	臼田町教育長 三石 晴夫
序	" " " "
例言	
本文目次・挿図目次・図版目次	
第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に対する動機	1
第2節 調査の概要	1
第3節 発掘調査日誌	3
第2章 五靈西12号古墳周辺の環境	5
第1節 五靈西12号古墳の自然環境（地形・地質）	5
第2節 考古学的環境	7
第3節 歴史的環境	13
第3章 五靈西12号古墳の構造	16
第1節 墳丘	16
第2節 石室	18
第3節 前庭部	23
第4章 五靈西12号古墳の出土遺物	24
第1節 遺物の出土状態	24
第2節 土器	30
1) 須恵器	30
3) 土師器	32
第3節 武器・装身具	33
1) 鉄鎌	33
2) 刀子	33
3) 鉄帶具	37
第4節 五靈西12号古墳出土人骨	38
1) 人骨の出土状態	38
2) 出土歯所見	39
3) 出土人骨所見	41
第5章 考察	42

第1節 五雲西12号古墳の構造	42
第2節 五雲西12号古墳の出土遺物	45
1) 土器	45
2) 鉄鎌	45
3) 銅帶具	46
第3節 五雲西12号古墳の被葬者	49
引用参考文献	51
あとがき	52

挿図目次

第1図 五雲西12号古墳周辺地形図・遺跡分布図	2
第2図 周辺遺跡・古墳分布図	8
第3図 五雲西12号古墳墳丘実測図	17
第4図 墳丘・石室層断面図及び葺石・緑石造残状態図	19
第5図 五雲西12号古墳第Ⅰ期の玄室	21
第6図 五雲西12号古墳の石室	25
第7図 五雲西12号古墳器種別出土遺物分布図	27
第8図 第Ⅱ期床面遺物・人骨出土状態及び狭道の縹散布状態	28
第9図 石室内遺物出土状態図	29
第10図 五雲西12号古墳出土土須恵器実測図	31
第11図 石室内出土土師器環実測図	32
第12図 石室内出土鉄鎌実測図No 1	34
第13図 石室内出土鉄鎌実測図No 2	35
第14図 石室内出土刀子実測図	36
第15図 玄室内出土銅帶具実測図	36
第16図 白田町古墳分布図No 2	43
第17図 銅帶模式図	46

付表目次

第1表 周辺遺跡一覧表	10
-------------	----

第2表 周辺古墳一覧表	11
第3表 五雲西12号古墳出土須恵器一覧表	32
第4表 石室内出土土師器一覧表	32
第5表 五雲西12号古墳鉄鏃一覧表	35
第6表 五雲西12号古墳刀子一覧表	36
第7表 五雲西12号古墳Ⅱ期出土人骨一覧表	41
第8表 白田町古墳一覧表No.2	44

図 版 目 次

巻頭図版	1、五雲西12号古墳石室内全景	2. 鉄鏃・銅帶具出土状態
図版1	1、五雲西12号古墳墳丘全景	
図版2	1、掘り下げ状況(第Ⅱ期)	
図版3	1、第Ⅱ期床面及び全景	
図版4	1、人骨出土状態	
図版5	1、2、人骨・齒出土状態	3、第一グループ・第二グループ・第三グループの齒
図版6	1、第Ⅰ期遺物出土状態	
図版7	1、古墳石室内全景	2、第Ⅰ期玄室床面
図版8	1・2、第Ⅰ期玄室床面	3、羨道
図版9	1、五雲西12号古墳右側面全景	2、五雲西12号古墳左側面全景
図版10	1・2、奥壁・側壁・羨門等の石の状況	3、古墳後方からの全景
図版11	1、五雲西12号古墳出土の須恵器・土師器	2、第Ⅱ期遺物出土状態
図版12	1、五雲西12号古墳出土の鉄鏃・刀子・銅帶具	
図版13	1、町民の皆さんの見学会スナップ	

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に対する動機

五箇西12号古墳は、入沢古墳群19基が点在し、その内、5基が五箇西地籍に所在するその一基にあたる。

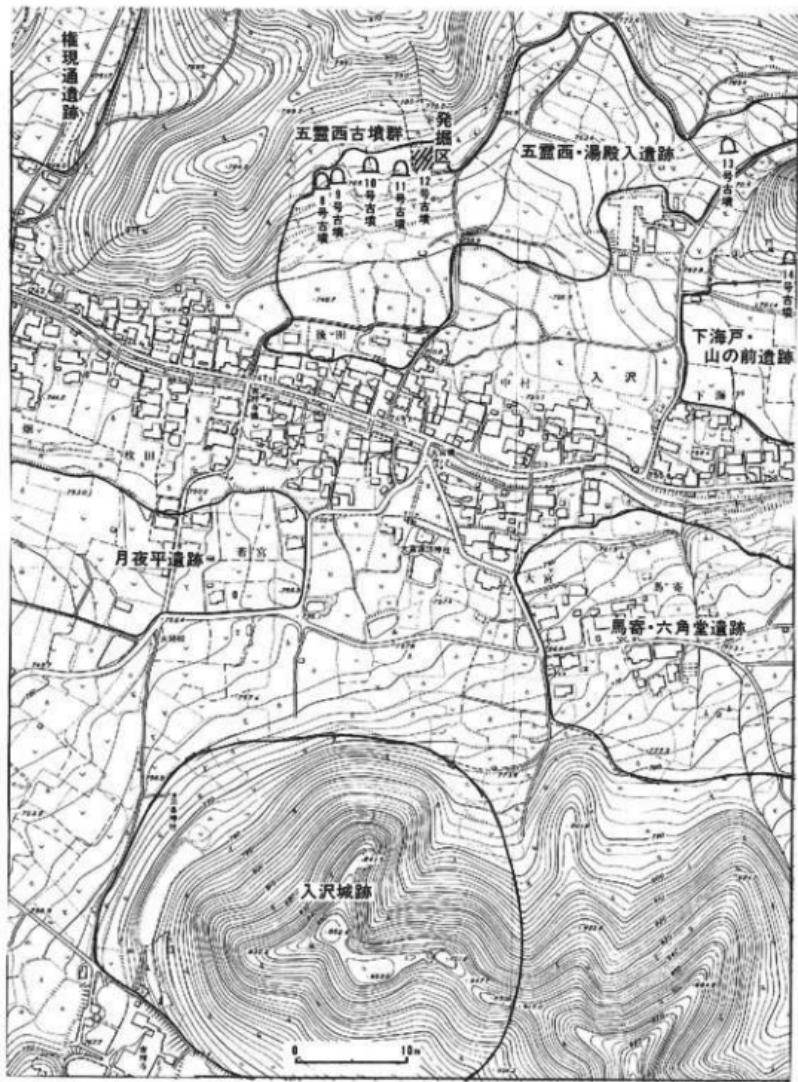
この発掘調査は、町農政課で、昭和60年度国庫事業新地域農業生産総合振興対策事業（果樹产地総合整備）による農道整備で、五箇西12号古墳が工事内にかかるとの連絡を受けた。

そこで、町教育委員会では直ちに文化財調査委員会副委員長であり長野県考古学会員である地元の三石延雄と共に現地確認を行なった結果、古墳の破壊を免がれない事態にあるとの見地から、町教育委員会では記録保存の計画を立て、緊急発掘調査を実施する運びとなった。

（事務局）

第2節 発掘調査の概要

- 遺跡名 五箇西12号古墳
- 所在地 長野県南佐久郡臼田町大字入沢1696番地
- 発掘期間 昭和61年3月3日～20日
- 調査委託者 臼田町農政課
- 調査受託者 臼田町教育委員会
- 調査に関する事務局
 - 三石 崇夫 臼田町教育委員会教育長
 - 丸山 正俊 " " 総務教育課長
 - 土屋 雅城 " " 社会教育係長
 - 浅川 博 " " 社会教育係
- 発掘調査団組織
 - 団長 三石 延雄 (長野県考古学会員・臼田町文化財副委員長)
 - 担当者 井出 正義 (" ")
 - 主任 島田 恵子 (" ")
 - 調査員 佐藤 敏 (" ")
 - 白倉 盛男 (佐久考古学会副会長)
 - 佐々木春藏 (佐久考古学会員)
 - 協力者 新津 きし・岩松 英明・鰐原 貞雄



第1図 五雲西12号古墳周辺地形図・遺跡分布図 (1 : 5,000)

第3節 発掘調査日誌

○3月3日（月） はれ

本日より五重西12号古墳の緊急発掘調査に入る。先ず簡単な地鎮祭を行い、早速東西南北に十字のトレンチを設定してより掘り下げに入る。3月といえどもまだ寒く、地面は凍結しておりツルハシで表土を剝ぐ。それでもここは日当りの良い場所なので凍結も地下20cm程で助かる。

奥壁は巾180cmを測り、1枚石を使用している。高さは150cm位になるだろうと推察されるがまだ解らない。左側壁は巾130cmを測る。

○3月4日（火） はれ

昨日に引続いてトレンチ掘り続行。玄室内的トレンチは1m掘り下げた時点で土層断面の実測を行ない、ベルトをはずす。さらに奥壁外側の墳丘トレンチを延長する。外側1mの地点より鉄片が出土する。

○3月5日（水） くもりのち雪

玄室内的清掃。骨が出土しあらめる。右側壁下より高台付环が出土する。これは平安時代中期に比定される遺物なので追葬であると考えられる。墳丘のトレンチ及び精査にかかる。葺石はわずか残存のみ。2時より雪。

○3月6日（木） はれ

雪掻きを行なって後、玄室内及び墳丘の精査続行。周溝は存在していない。ほぼ外郭が顕現する。また、玄室内より内面黒色の环が伏せた状態で出土し、歯と骨もかなりまとまって出土する。第2回目の玄室内土層断面図を取る。

○3月7日（金） はれ

前庭部、澳門の精査、玄室内の第Ⅱ期（追葬）床面の清掃を行なう。

○3月8日（土） はれ

清掃後写真撮影を行なう。また、今回の農道整備のため破壊されるもう一基の19号古墳の試掘に入る。この古墳は天井石が上部に置いてあったため、古墳として登録されていたが、その様相からして疑問であった。東西・南北に十字のトレンチを設定して掘り下げに入る。結果、ヤックラであることが判明する。天井石は隣接する11号、あるいは耕作時に破壊してしまった10号古墳のものであるとおもわれる。

○3月10日（月） 雨のち曇

本日は町民の皆さんとの見学会を行なう。前日見学会のためのパンフレットを用意したので見学に訪れた皆さんに配布する。

午前60人、午後30人と青沼小学校の児童30人が訪れて、初めて調査された入沢古墳群の様相を熱心に見学していた。

○3月11日（火） くもり後雨後雪

玄室内出土の骨・遺物出土地点の実測を行なう。午後より雨になり中止、その後雪となる。

○3月12日（水） はれ

雪が積っていたので作業を休む。三石延塙団長が玄室の土層をふるいにかけて、玉類齒等の検出を行なう。成果があつて4個の歯が見つかった。

○3月13日（木） はれ

玄室内の第Ⅱ期床面の敷石の実測を行なう。その後掘り下げに入る。刀子と火葬とおもわれる光沢のある硬い骨片が出土する。また、銅帶具が出土し驚く。寒く外の作業はきつい。

○3月16日（日） はれ

羨道部の上面を覆っている石の実測を行なう。
後世のくずれかとおもわれるが念のために精査
する。

玄室内は第Ⅰ期の敷石があらわれる。きれい
に敷きつめられており、古墳築造当時の様相が
忍ばれる。敷石直上より鉄鏃がかなり出土する。
玄室内左右の壁下、カマチ石の左右等に集中し
ている。

○3月17日（月）くもり

羨道より刀子、須恵器壺の破片、蓋の破片が
出土する。玄室、羨道の精査および断面実測を行
なう。連日寒くて涙が出る程であるが皆では
げまし合いながら作業を続行する。

○3月18日（火）くもり

玄門、前庭の掘り下げに入る。この部分は柿
の木があたり、道路を造成する際削り取られ
たりしているため破壊部分が多い。

残りの断面実測及び古墳全体実測を行なう。
毎日、見学者が多く入沢の常会では、調査して
いるこの古墳を集会所へ移転保存しようという
話が持ちあがり、区出身の町会議員さんも何度
か視察に見える。

○3月19日（水）

本日は、町農政課の技師の方々をお願いして
古墳および周辺のコンタを実測していただく。
専門家だけに手際よく能率的であった。残りの
断面実測を行なう。

○3月20日（木）はれ

全体の清掃をした後写真撮影を行なう。その
後石室内の敷石の実測および敷石下部の精査を
トレンチ状に行なう。また、トレンチの埋めも
どし、器材を撤収して本調査を終る。

（島田 恵子）

- 3月24日～3月30日 図面整理
 - 3月31日～4月5日 遺物洗浄・註記、
土器接合復原
- 昭和62年度
- 7月24日～7月31日 遺構トレース
 - 8月17日～8月25日 遺物実測・トレース
 - 9月27日 遺物写真撮影・一部原稿執筆入る。

昭和63年度

- 1月4日～5日 図版作成
- 1月5日～25日 原稿執筆
- 1月26日～30日 編集
- 2月1日～3月27日 印刷・校正
報告書刊行

第2章 五霊西12号古墳周辺の環境

第1節 五霊西12号古墳付近の自然環境（地形・地質）

臼田町入沢の谷川沿岸地域は南佐久郡の千曲川最上流部の右岸に分布する佐久山地の最西北端に当っている。この佐久山地は日本列島本州中部の地勢を大観すれば、東京都の奥多摩地方から埼玉県秩父地方、群馬県西上州と長野県佐久地方の県境に続く大山地“関東山地”的西北端の部分にあたっているわけである。関東山地の主峯は雲取山（2018m）・甲武信ヶ岳（2483m）・金峯山（2595m）・三国山（1828m）など続き高峰林立奇岩絶壁幽邃な風景に恵まれた自然景觀は秩父多摩国立公園の指定を受け保護されている。これは日本列島の主要な背梁山脈の一つで古生代以来の地層は複雑な構成と長期の地殻運動と浸食に耐えて自然秘境を作っている。全体の地質構造の配列分布が東南方向から西北方向に連続していて、その西北端部が佐久山地となっている。

佐久山地は、南から甲武信ヶ岳・金峰山・三国山・御座山・茂来山・大久保山と続き南佐久郡東部県境分水嶺を形成し、荒船山・妙義山の旧期火山地帯に連続する山地を総称するもので入沢谷はその中間部稍北寄り県境近くから源を発する谷川に解折された小谷である。谷川の源流は田口峠と余地峠の中間部にあり、古期岩層と第三紀層の分布地帯で谷は深く尾根部分には露岩が屹立し傾斜がはげしく谷幅は極端にV字形で狭いために、県境を越える峠路さえ古来から拓かれていた。入沢谷から上州へ越すには赤谷部落東方の谷川沿い1.5kmのこうち峠を登って余地の山の神に出て、下仁田——佐久線の余地峠を越さなければならなかった。谷川は赤谷で北から流下する小支流を合わせてやゝ谷底平地が広がり西流して入沢谷を下り、千曲川に合流する。赤谷附近には鉱泉湧出地点が二ヶ所あり、明治末から大正期にかけては赤谷の湯・荷通の湯の二戸の山の湯宿が出稼ぎの傍わざかに煙を上げていたが既に絶えて久しい。

入沢谷は西に開いた細長い三角形の谷で、南は大久保山の山腹斜面・北は荒船山からの溶結凝灰岩のゆるい山なみが迫っている。これらも斜面と谷底平地の交る崖推面の入沢部落東部に御靈西古墳群及び遺跡は南面日向側に立地している。

入沢谷は、入沢部落下西部でようやく谷幅約1m内外に増し谷口扇状地と千曲川河岸段丘の月夜平の洪積層面に続き、以西が千曲川沿岸平地沖積層の佐久平になっている。

入沢谷と余地谷の境界分水嶺尾根は、大久保山を主峯とした秩父古生層の分布地帯で、チャート・硬砂岩・粘板岩と薄い石灰岩が骨格となっており、大久保山・曾原山・宿岩にはチャートの好露頭があり、一の瀬橋脚下・二の瀬橋下千曲川岸・岩木入口には厚い硬砂岩層が露出しており、一の瀬では大正年代まで石灰岩を採掘して石灰焼窯を築き、石灰を製造して佐久地方一般に販売していた。この石灰岩には次のフジリナ化石が発見されて、佐久地方秩父古生層は二疊紀上部と決定され、今



日でも貴重な記録となっている。

—の潤産石灰岩中のフズリナ化石（東京文理大
藤本治義教授発見）

Neoschwagerina craticulifera

(SCHWAGER)

Neoschwagerina douvillei OZAWA

Yabeina globosa (YABE)

Yabeina kaisensis FUJIMOTO

Staffella cf. Weageni (SCHWAGER)

この秋父古生層は、関東山地全体の中における分布と同様に東南——北西の走行に沿って南北幅は狭く、西北方向には長い帯状構造を示し、中生層と交互に鱗覆構造を作っていることで知られている。佐久町附近では十石峠南方から茂米山頂を含めて、大久保山の赤色チャートを挟み、宿岩のチャート大塊で千曲川断層に断ち切られて、海瀬秋父古生層帶と命名され、帯状構造の一部分として分布している。

古生層の上面には、余地峠——赤谷奥——田口峠——内山川上流地域と第三紀の海成層砂岩・粘板岩・頁岩の互層が広範囲に分布し二枚貝などの化石を産している。赤谷附近の黄褐色砂岩層がそれにあたり、稀に化石も見出され構成砂粒が均一化しているために佐久地方としては珍らしい良質な荒砥石として採石利用されている。

さらにこの第三紀層を貫いて荒船火山が噴出し多量な熱火山灰を多量に広範囲に堆積したものが溶結凝灰岩で、荒船火山をとりまく山麓一帯に分布し、佐久石と呼ばれて古くから採掘され、石材として利用され佐久地方の石造文化財・石材加工原材・石垣石役等土木用石材にはほとんど佐久石が利用され、採石場は小海線沿線東方山麓の佐久市附近から佐久町まで數十ヶ所が現在も営業を続けており、古くから佐久石とし他地方にも移出され名声が知られている。臼田町田口辺から入沢に至る山麓、平林山千手院東方にも採石場がある。採石場以外でも入沢風穴の山と石、曾原湯附近、畠ヶ中北方重なり岩、大日向入口三昧脇や大日向妙義山などにも美しい柱状節理を作っている。

御靈西古墳発掘の際の観察では、石室、羨道作りに利用された大型石材は全て佐久石の厚い板状石材が積立てられており、石室奥壁は幅2m、高さ1.8mの大佐久石材が活用されていたのは美事であった。石室内の床敷石には谷川の河床礫の亞角礫となった佐久石が大部分を占め、チャート・輝緑凝灰岩・硬砂岩と第三紀層の砂岩礫岩の小礫がわずか小積めに利用されているに過ぎなかった。これらは何れも入沢谷産のもので充足されていた。

古墳は、溶結凝灰岩の斜面山麓に北風から守られ南向きの陽光のあたる谷中平地を一望できる位置に立地していた。この附近が標高760m内外、弥生時代以来平地住居・稻作の佐久平に於ける高距限界であったようである。

（白倉 盛男）

第2節 考古学的環境

五靈西遺跡は、臼田町入沢字五靈西に所在し、かつて佐久石を産出した石山群の最南端に位置し、南に緩傾斜した山腹で現在は畑地である。東に雷神を祀る五靈神社があり五靈西と称している。

此處には、入沢古墳群の内10基の古墳が存在する事になっていたが、昭和61年～62年にかけて臼田町教育委員会が実施した、臼田町遺跡詳細分布調査の結果、其の数は5基であることが確認された。又、最近畑の耕作中に土器が多く出土し、縄文～平安時代にかけての遺跡である事が判明した。

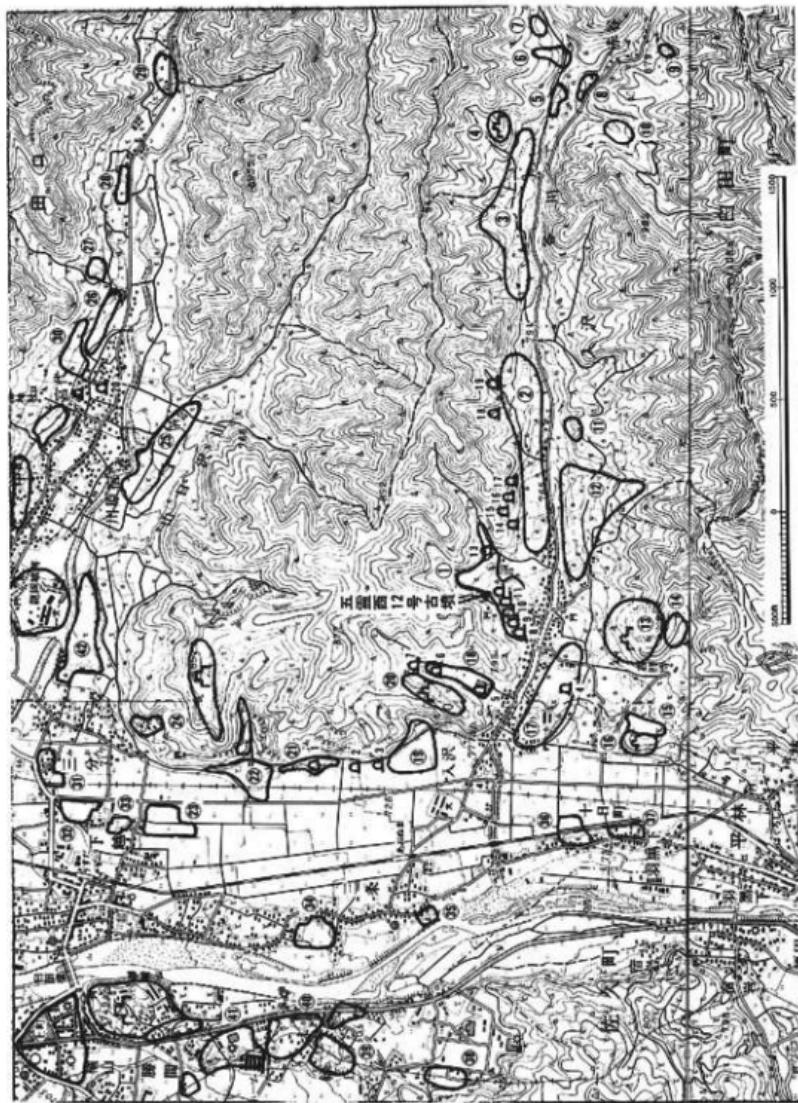
入沢部落は、谷川をはさんで沢状に東に伸び、遺跡はこの谷川の両側に存在する。ではこの遺跡の在り方を時代別に順を追ってたどってみたい。

入沢部落の上、谷川北側の山麓の台地に月通沢水石遺跡があり、東日本では珍しい瀬戸内技法により調整された石器が発見されている。その他石核・黒曜石・剝片等も発見されている。地形的にみて先土器時代の遺跡としては小規模であると考えられる。

次に縄文時代の遺跡を見てみよう。五靈西遺跡の台地から見下すと右前方の谷川扇状地の中央台地に月夜平遺跡が存在する。月夜平遺跡からは、縄文前期・諸磯A式、下島式土器の出土があつたと記録されているが、表面採集ではこの時期の土器片は見られない。中期加曾利E式、後期の加曾利B式、堀ノ内式の土器、土偶、滑車型耳飾の出土があり、この他、石鎌、打石斧、磨石斧も多量に出土している。また、遺跡西端の上磯部地籍より、長さ125cm、最大径20cmを測る磨製の石棒（臼田町文化財指定・大宮諏訪神社蔵）が出土している。磨製の石棒としては日本一の大きさで、隣町の佐久町高野町北沢より出土した、打製の石棒（長さ223cm・最大径42cm）と共にまさに日本一の大石棒として誇れる遺物である。月夜平遺跡は、八幡一郎先生の南佐久郡の考古学的調査にものつていて臼田町最大の縄文時代遺跡であり、さらに弥生時代・古墳時代・平安時代・中世に至る複合遺跡でもある。

赤谷部落の北西には、堂平遺跡があり、62年調査の詳細分布調査で横刃形石器が表面採集され遺跡であることが判明した。堂平遺跡と隣接して、西墓地堂・東墓地堂の両遺跡があり、西墓地堂遺跡からは、磨製石斧が採集されている。赤谷部落を下った谷川右岸の山麓には、月通沢・水石遺跡があり、打製石斧・横刃形石器・石鎌・黒曜石剝片等の石器類が主に採集されており、さらに下った山麓には、下海戸・山の前の大遺跡があり、縄文後期の土器、打製石斧、横刃形石器等が表面採集されている。対岸の山麓に位置する馬寄六角堂遺跡からは、昭和49年に六角堂の筆者の畑において、長芋の掘り取り作業中土中より、土器・石器が出土し、その中より魚形の陰刻が施された土器片が発見された。（昭和55年9月「長野県考古学会誌38号」に詳細を発表）時期は、中期後半曾利式土器であり、石器類は、打製石斧、横刃形石器、凹石、石鎌等である。牧平、馬寄地区からは、打製石斧、横刃形石器、凹石等が採集されており、縄文時代の遺跡の範囲はかなり広く分布している。

第2図 周辺道路・古墳分布図 (1 : 25,000)



五雲西12号古墳が所在する、五雲西・湯殿入遺跡は、後田地籍より石劍（青沼郷土館蔵）、打製石斧、石鎌等が採集されている。北西側に隣接する権現通遺跡からは打製石斧が採集され、十日町の荒谷遺跡からも打製石斧が表面採集されている。

昭和48年発掘調査された三分の井上遺跡からは、縄文前期初頭花積下層式、後期初頭壠の内式土器が出土したが、共に住居址検出には至らなかった。北側に連なる戸井口遺跡から打製石斧、凹石が、小山沢遺跡では、石鎌、黒曜石剣片が、遍照寺遺跡では打製石斧が採集されている。

北東側の田口に入ると山口沢出口の山口沢遺跡より、縄文後期加曾利B式の土器片、凹石、黒曜石剣片が採集され、宮東遺跡からは凹石の出土があったとされている。千曲川左岸下小田切地区的遺跡では、丸山遺跡、勝間原遺跡、栗ノ木遺跡があげられる。その内丸山遺跡からは、加曾利B式、同じくB式土器が、勝間原遺跡では加曾利B式土器、栗ノ木遺跡からは、石鎌、黒曜石剣片がそれぞれ表面採集されている。

周辺遺跡41遺跡の内、縄文時代の遺跡は18遺跡を数え、その内土器が採集されている遺跡は12遺跡で、残り6遺跡は打製石斧、石鎌、凹石等の石器類のみ発見されている遺跡である。

弥生時代に入り臼田町へ最初に人々が居を構えたのは、入沢の月夜平遺跡である。弥生時代中期初頭の東海系の土器が出土している。三分の田中遺跡からは、中期栗林式土器、石包丁、始刃の磨製石斧等が発見されている。また、昭和48年発掘調査された井上遺跡からは後期初頭吉田式土器が出土した。一部発掘調査した溝状遺構は、弥生時代の円形周溝墓であったと考えられるが区域外となり完掘に至らなかった。住居址も調査区域外に広がっていたとおもわれる。昭和62年4月に発掘調査した勝間原遺跡は、後期箱清水式期の住居が2軒検出された。これは、丸山・栗の木遺跡を含む遺跡群の一部であり、中部電力㈱の送電線鉄塔敷地という限られた範囲の調査であり、また、昭和の初め発電所の建設された際も多く土器が出土したと聞く、東側に千曲川の断崖があり、西に片貝川が蛇行している。片貝川沿岸にその生業の地を求めて、居住地は千曲川断崖上の安全な地を利用した弥生時代後期の大集落があったものと考えられる。

千曲川右岸東方には弥生時代の遺跡が多い。井上遺跡、田中遺跡は平坦地に立地し、荒巻遺跡、山際遺跡、遍照寺遺跡は山麓に位置する。宮代遺跡、大工原遺跡、丸山下遺跡は田口部落の上に所在し、共に弥生時代後期箱清水式土器が表面採集されている。

入沢の月夜平遺跡は、谷川扇状地中央に位置し、弥生中期～後期箱清水式土器の出土している事は前述した通りであるが、其の他に五雲西・湯殿入遺跡、下海戸・山の前遺跡、月通沢・水石遺跡、臼窪遺跡、藤原遺跡等から後期箱清水式土器が採集されている。これらの遺跡は、僅かな出水・沢水にその生活を求めて入り、小規模の集落を形成していたものと考えられる。

古墳時代の遺跡としては、昭和48年発掘調査された井上遺跡があり、古墳時代中期和泉期の住居址1軒、後期鬼高期の住居址三軒が検出されたが、大きな遺跡のはんの一部が調査されたにすぎない。北方に田中遺跡、西塚田遺跡があり、東側山麓に荒巻遺跡、山際遺跡があり、和田前遺跡が南

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
				先土器	縄文	弥生	古墳	平安	中世	
1	五箇西・湯殿入遺跡	入沢、五箇西、湯殿入、後田	山麓	○	○	○	○	○	○	
2	下海戸・山の前	下海戸、宮林、山の前	山麓	○	○	○	○	○	○	
3	月透沢・水石	黒打田口、桃坂、荒神出口、月透沢、水石	"	○	○	○		○	○	
4	水石城跡	入沢 水石	山林					○		
5	西墓地堂遺跡	西墓地堂	山麓	○			○			
6	東墓地堂	"	東墓地堂	"			○			
7	萩の入	"	萩の入	山麓			○			
8	堂平	"	赤谷堂平	山麓	○					
9	赤谷	"	赤谷、大深山	"				○		
10	臼窪	"	日向臼窪、東田窪	"		○		○		
11	藤原	"	藤原	台地	○		○			
12	馬寄、六角堂	"	馬寄、牧平、六角堂	"	○				○	
13	入沢城跡	"	山林					○		
14	吉祥寺遺跡	"	寺久保、諏訪の入	山麓			○	○		
15	野呂沢	"	野呂沢	"			○	○		
16	十二山城跡	"	三界塚	山林				○		
17	月夜平遺跡	"	月夜平	台地	○	○	○	○	○	
18	権現通	"	権現通	山麓	○			○		
19	和田前	"	和田前	山麓				○		
20	磯部城跡	"	磯部	山林					○	
21	山縣遺跡	"	山縣	山麓	○	○	○	○		
22	荒巻	三分荒巻、柔羅田	"		○	○	○			
23	井上	三分井上	平地	○	○	○	○			昭和48年発掘調査
24	遍照寺遺跡	"	寺久保	山麓	○	○			○	
25	山口	田口	山口	"	○			○		
26	大工原	"	宮代	"		○		○		
27	明跡	"	宮代明跡	"			○	○		
28	日向大工原	"	日向大工原	"			○	○		
29	丸山下	"	丸山	"			○	○		
30	宮東	"	宮代	台地	○	○		○		
31	西塚田	"	三分、西塚田	平地			○	○		
32	田中	"	三分、田中	"	○	○	○			
33	戸井口	"	戸井口	"	○			○		

No	遺跡名	所在地	立地	時代						備考
				先土器	縄文	弥生	古墳	平安	中世	
34	觀正田遺跡	三条觀正田	平地					○	○	
35	南裏	" 南裏	"					○		
36	荒谷	" 十日町荒谷	"		○			○		
37	十日町	" 十日町	"						○	
38	千曲台团地	" 北川原	山麓					○		
39	栗ノ木	" 下小田切栗ノ木	扇状地	○	○					
40	勝間原	" 勝間	"		○	○		○		
41	丸山	" "	"	○	○			○		

第2表 周辺古墳一覧表

No	古墳名	所 在 地	立地	遺 様	備 考
1	山縣1号古墳	入沢、山縣9番地	山麓	僅かに側壁が残る	勾玉2、高環1、出土
2	" 2号"	" 上大深88"	"	青沼小学校に移転	勾玉4、高環出土、
3	" 3号"	" " 108"	"	奥壁、側壁の一部が田口用家の土手に口をあけてのこっている	
4	月夜平4号	" 月夜平3224"	丘陵	石室露出、周囲は籠竹のやぶに覆われている。天井石は北方にすり落ちている	
5	権現通5号	" 中権現1521"	山腹	奥壁と側壁の一部を残し、天井石はすり落ちている	
6	" 6号"	" " 1415"	"	奥壁が斜面に露出天井石がはずれ落ち埋まっている	
7	" 7号"	" 遠見塙1408"	"	奥壁が残り、右側壁は内に倒れ天井石は落ちている	
8	御靈西8号	" 御靈西1693"	山腹	側壁と奥壁の一部が僅かに残る	
9	" 9号"	" " 1693"	"	奥壁、側壁が僅かに残る	
10	" 10号"	" " 1692"	"	頬の中に石室の一部が残る小形の古墳であったが、昭和50年頃盗掘に見り破壊される	
11	" 11号"	" " 1992"	"		
12	" 12号"	" " 1696"	"	昭和61年、発掘調査	本報告書の古墳
13	湯殿入13号	" 湯殿入1797"	山麓	畑の中に石室の形が残っていたが、破壊され石のみ残る	
14	天神平14号	" 天神平1857"	"	天井石は失われているが、石室は土中に残る	
15	" 15号"	" 天神平"	山腹	林の中に埴丘が残り、塞き石がみられる	
16	" 16号"	" "	"	林の中に埴丘が残り、埴丘の中央が団んでいるが、完全に破壊されていないと考えられる	
17	" 17号"	" 宮林1850"	"		
18	一万窪18号	" 一万窪1965"	山麓	石室が残り、現在農具小屋になっている	直刀、鉄鏃出土
19	西ノ窪19号	" 西ノ窪1973"	"	天井石は除かれているが、石室の形は残る	
20	上宮代1号	田口・上宮代	平地	埴丘・径9.1m、高2.1m	

につづく。

次に古墳の分布を見てみよう。入沢古墳群は、山際遺跡に初まり山際1号、2号墳、3号墳があり、権現通西側山腹の日向面に、権現通4号墳、5号墳、6号墳がつづき、月夜平遺跡南側斜面に月夜平7号墳が存在する。さらに入沢部落中央北側の山腹台地に立地する五雲西遺跡に本五雲西12号古墳が存在し、その西側に11号墳、10号墳、9号墳、8号墳が連なるように隣接している。湯殿入出口の山麓の畠地に13号墳があり、さらに天神平の山林中に、天神林14号墳、15号墳、16号墳、東につづく宮林に17号墳があり、さらに東に一万窪18号墳があり、其の東・西の窪に19号墳があり、入沢古墳群はここで終わる。また、岩水舟久保地籍に古墳1基が（地図に入っていない）存在し、隣接した佐久町曾原に1基あり、ここで南佐久郡千曲川右岸の古墳は南限となっている。

入沢古墳群は、その数31基といわれ入山古墳群とされていた。（信濃史料・日本の考古学第四古墳時代）しかし、入山という地名も無く、土地の人でも解りにくいので、昭和58年発刊された、「長野県史・考古資料編」で入沢古墳群と改めた。また、31基という数はその後なん度も調査したがどうしても見当たらず、耕作時にじゃまになる石を積み上げたヤックラを数えている事が解った。昭和62年11月臼田町遺跡詳細分布調査に依り、その後新しく発見された4基を加えて、正確な数は19基であることが判明した。

奈良・平安時代の遺跡が多い。やはり当時の中心は月夜平、原周辺であったと考えられる。隣接遺跡は、権限通遺跡、五雲西・湯殿入遺跡、下戸戸・山の前遺跡があげられる。また、月通沢・水石遺跡、東墓地堂遺跡、西墓地堂遺跡、萩の入遺跡、赤谷遺跡、臼窪遺跡、藤原遺跡、吉祥寺遺跡等山間部に発見されている遺跡は採集される遺物から見て、沢水等に生活の場を求めて入った、2～3軒の小規模な高地集落であったと推定される。その他、十日町の東荒谷遺跡、三条の南裏遺跡、観正田遺跡からも僅かではあるが、当時の遺物が発見されている。三分地区には、井上遺跡、荒巻遺跡、戸井口遺跡、田中遺跡、西塚田遺跡、三分遺跡等があり、地図に示した田口地籍には、山口遺跡、大工原遺跡、宮東遺跡が該期の遺跡としてあげられる。

入沢には、中世城跡が4城存在している。磯部城跡、入沢城跡、水石城跡、そして新しく城跡である事が判明した十二山城跡である。その歴史的背景は第3節の歴史的環境の節で述べるので、ここでは中世の遺跡として簡単に記述した。

入沢部落の南の尾根先端に入沢城跡があり、その山麓南方に吉祥寺遺跡がつづいている。石臼、茶臼、土師質土器、陶器片等が発見されている。また、城跡の南側から西側の山林中からも土師質土器が表面採集されている。南東側山麓に馬寄、牧平、六角堂の地名があり、六角堂地籍には牧場跡がある。馬の追込みと言われる土手跡が残っており、鐵鏟等も発見されている。さらに馬寄地籍からは、土師質土器、陶器片等も表面採集されている。

入沢上の月通沢・水石遺跡からは、中世陶器片（天目）、石臼など発見されており、北側尾根上に規模は小さいが水石なる地名についてであるが、奥に大きな石があり此

の石の中央に大きな凹がある。この凹に何時も水が溜っていて、昔からこの凹の水が乾くと雨が降るなどと言われていた。水石の地名はこの石から起ったと伝承されている。

また、十二山と言う地名については、昔、十二椎現が祀られていたのではないかと伝承されるが、確かなことはわからない。以前、前方後円墳ではないかと想定されていたこともあった。西側から見ると山の形は似ているが、物的確証はなにもない。山の南端、加藤氏の墓の近くに三界塚、7号墳として登録されていた古墳があった。しかし、この古墳も昭和62年11月に実施した白田町遺跡詳細分布調査において縮密なる調査の結果、自然石の開いを古墳としていたことが解った。なお、この調査の際、大きな発見があった。それは、十二山の北側から西側にかけて5段の段郭が明確に残っていたことである。東側にかけてはその痕跡はあるが耕作によって削り取られていた。この城跡は地形的な面から入沢城の出城であると考えられる。

以上が先土器時代から中世における入沢周辺の考古学的環境である。入沢部落は狭い沢すじではあるが実に1万年以上も前から中世まで活発なる人間の足跡がたどれ、その歴史の深さに驚かされる。

(三石 延雄)

第3節 歴史的環境

五雲西12号古墳は、白田町入沢部落の北方山麓の字五雲西に所在する。入沢の村名の初見は鎌倉時代末、嘉慶4年(1329)の諏訪上社の「御射山頭役結番之事」(守矢文書)に「平賀郷内青沼、入沢地頭」とあり、入沢が古代の青沼郷に属していたことはまちがいない。それより以前平安時代の半ば、10世紀に書かれた倭名類聚抄には、佐久郡に8郷があったことが記されている。そのうち旧佐久郡には刑部郷と青沼郷が存在し、刑部郷は千曲川左岸の野沢、桜井、前山等の片貝川下流域を中心とし、青沼郷は平賀、中込、田口、入沢等の千曲川右岸の平地にその郷域が想定されている。当時は律令制による国・郡・郷(里)の地方制度がしかれ、郷は50戸を単位に編成されていた。50戸に満たないものは余戸郷とした。余戸郷は佐久町以南に想定されている。

1戸は戸主(族長)を中心に同一戸籍に編成された法制度上の家族であって郷戸とよばれ、班田収授の対象となり、租・庸・調の税を負担した。戸長の支配のもとに10人以上、数十人、時には100人をこすような戸もあった。

しかし、「毎日の生活は夫婦を中心に数人の単位でくらしていた。これが堅穴住居址にみられる家で、戸戸とよばれる。1郷50戸の律令制下では、平賀、田口、入沢等の千曲川右岸一帯の青沼郷全体で50戸であるから入沢地区にはいったいどれ位の人が住んでいたのだろうか。」

五雲西12号古墳は、8世紀代初につくられ、追葬は平安時代のはじめ～中頃、9～10世紀に及んだものと思われる。この時代の周辺遺跡として下海戸・山の前、月通沢、一ヶ石岩陰、月夜平、井上、田中、新巻遺跡等がある。これらの人たちは谷川扇状地の末端や、新巻付近の山麓の湧水を利

用して稻作や畠作を行っていた。平安時代末には律令制がくずれ、郷戸が分解して、戸戸の独立が強まり、人口の増加につれて、山間部にまで開拓が及んで新しい村がつくられていった。これらは平安時代の遺跡の増加によってみることができる。谷川扇状地の周辺には十日町、三条の集落も形成してきた。

鎌倉時代、佐久郡には伴野荘と大井荘があり、甲斐源氏小笠原長清の子孫がそれぞれ地頭となつて伴野氏と大井氏を称して統治した。伴野荘は旧刑部郷の地に成立したもので野沢、桜井、前山、大沢、臼田等千曲川の西岸を占め、大井荘は旧大井郷の地に成立したもので、岩村田を中心とする一帯の地を占める。それに対して旧青沼郷の地は、国衙領の平賀郷となって、甲斐源氏の平賀氏が地頭職をもつていた。そのことは前記嘉暦4年の守矢文書に、「十二番五月会分平賀郷内青沼・入沢地頭並平賀又三郎、同彦三郎女子等知行分」とあるのによつて知ることができる。このうち青沼は下越・三分等の周辺をさしていると考えられる。諏訪神社の祭りの頭役は信濃國中の地頭・御家人を14組に分け、1組は田畠80町を基準にして編成したといわれるので、青沼・入沢等の田地を含ませると80町歩に達するほどの有力な村に成長していたということになる。

室町時代になると、文安3年(1446)に平賀氏が滅亡して、以後平賀郷が大井氏の所領となつたことが諏訪大社上社の文書「諏訪額満注進状案」によつて推察される。そして応仁3年(1469)には入沢長助が諏訪大社の頭役をうけている。ところが文明14年(1482)には入沢長義にかわって、田口民部少輔長綱が、入沢の惣領であるからといって強引に頭役をうけた。入沢氏と田口氏の出自は明かではないが、両氏はそれぞれ当時入沢と田口の地頭であり、しかも両氏が入沢惣領職を争うほどの近接した関係をもつていたのであろう。

入沢郷の一部をなす十日町にある国の重要文化財の六地蔵幢は永享12年(1440)に建立されているが、これは当時木伐窪にあった千手院津金寺の大門付近に建てられたものといわれる。当時十日町は津金寺の門前町として、十日ごとの市が開かれるようになつたのがみられたものと思われる。奥州から修業の旅に出て諸国をめぐり歩いたがまだ悟りを開けなかつた秀鶴という坊さんが、ここにとどまって衆生濟度の発願をしてこの六地蔵幢をつくつたものであろう。

青沼郷八幡宮には天文7年(1538)に大井源昌が鰐口を寄進している。「信州佐久郡大井庄青沼郷八幡(中略)頭主大井美作沙亦源昌」の銘があり、当時青沼・入沢は大井氏の勢力下にあり、大井荘といつてゐたことがわかる。この鰐口は現在上田市東前山の前山寺に所蔵されている。天文9年には武田信虎が大軍して佐久郡に侵入し、臼田、入沢の両城をはじめ數十城を攻略した。当時入沢城は前面に十二山城と磯部城の二つの砦を構え、後方に水石城を配して守りを固めていたが、武田軍を防ぐことはできなかつた。これから入沢は武田氏の勢力下に入った。武田氏の川中島方面への進攻にあたり、前記八幡宮の鰐口も持ち去られ、塩田城に近い前山寺に所蔵されることになったのであろう。武田氏時代には田口城主依田(相木)能登の所領に属していたものと思われる。天正6年(1578)上諏訪造宮帳には「入沢之郷3貫文、代官水石和泉守」とあるから、水石氏が代官を勤

めていたものであろう。

天正10年（1582）武田氏滅亡後は小諸城主依田康国領となり、信州佐久郡之内貫之御帳に、「三百貫入沢本郷、三百貫いそへ（礪部）、三百貫中村 三拾貫徳分所」とあり、合計930貫という大村になっている。天正18年には小諸城主仙石秀久領となつたが、元和3年（1617）仙石忠政領の御郡中永楽高辻には「一千八百八石六斗入沢の分、うち五二六石いそへ、五二六石中村 五二石六斗徳分所、一七五石平林」とある。このうち平林は嘉慶4年の前記「守矢文書」に「三番五月会分、左頭、平賀郷小井河、東明寺、内山、平林地頭（中略）」と記されていて、はやくから平賀郷に属する独立の古村であった。

江戸時代の入沢は宝永元年（1704）松平乗眞の田野口（のち龍岡）藩領となり明治に至った。寛政10年（1798）の田野口御役所地方雜集によると、村高1048石2斗8升8合、段別91町2反余、家数196軒、人數928人ほかに神主2人、山伏2人、神子1人、浪人1人、医者1人、酒屋2軒、鍛物師1人、鍛冶2人、大工2人、紺屋3人、壁塗1人、桶屋2人、策頭1人、座頭1人とある。米は児落場峠、余地峠を越えて上州紙沢の米市場に売り、幕末から明治にかけては、蚕種、朝鮮人蔘等を上州に売り出している。明治22年町村制施行により平林村と合併して青沼村となった。

（井出 正義）

第3章 五雲西12号古墳の構造

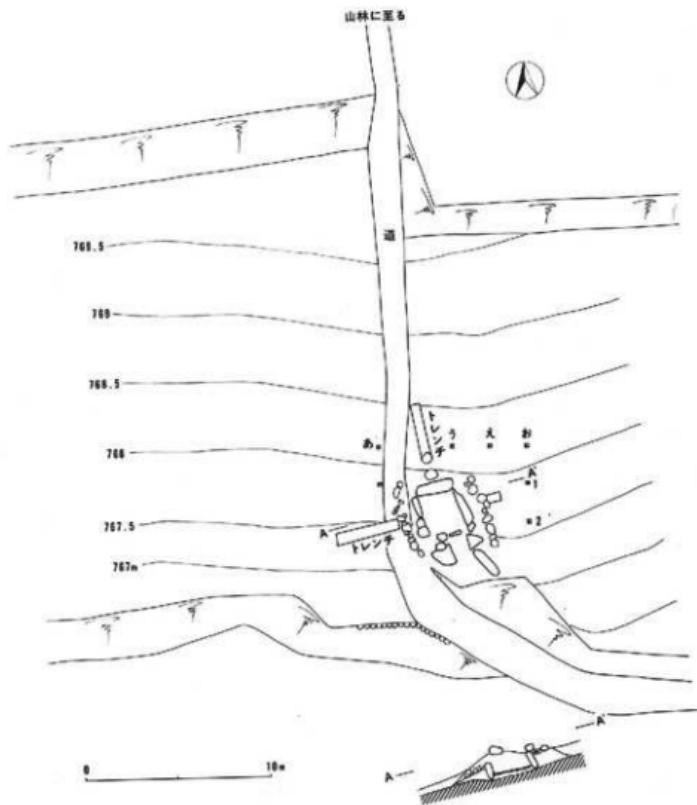
第1節 墳丘

五雲西12号古墳は入沢古墳群19基の内、五雲西地籍に所在する5基の中の1基にあたる。所在地の地形は、溶結凝灰岩を産する山麓の南向き斜面にあたり、陽当たりがよく周辺一帯は段々畑となっている。この斜面段上からは、西に開ける細長い入沢部落を一望できる最も条件の良い場所である。

本古墳は大正時代に山頂付近の溶結凝灰岩を採掘し、それを運搬する道路を作るために、前庭部と左側辺が大きく削り取られ、道路際には石垣が組まれていた。また、耕作により墳丘は全て削り去られ、天井石はすでに奥壁が地上に頭を出しているといった状態であった。こうした状況から墳丘の構築状態は残された一部分と調査の結果から観察される面を主に、先ず墳丘の外装からみてみよう。

五雲西12号古墳は、階段を成す地形の段上に外周が納まるように緩傾斜する地形をうまく生かして構築されている。また、石室周囲の直径5mを測る外周を巡る石は、墳丘の基盤造成時点より築かれたものであろう。類例が少なくやはり地形を考えての設計であるとおもわれる。石は、奥壁の外側に50cm×55cm大が2個、東側に65cm×40cmを測る最大のものから、20cm×30cmの最小を含めて9個が南北に一列に連なって配石している。西側は12個で、最大が52cm×50cm、最小が20cm×20cmを測る。これ等の石は、安山石で角が丸くなめらかであり、付近の谷川から集めたものと色・素材共に異なっており、大半が千曲川から運びこんだものであるとおもわれる。また、これ等の配石は当時の地形状況のもとに埋込まれており、東側と西側ではレベルの差が大きい。さらに南北に傾斜しているため南に下るにしたがってレベルも高低差を増す。この数値を東側と西側で比較すると、東側を0cmとした場合、西側は最上段（北側）で50cm、下段で30cmを測る数値で西側が低く下っている。第3図での全体図に示してあるように、この西側における配石は農道の下にあり、大正時代における採石運搬によって多少下ったことも考えられるが、いずれにしても西側へいくらか地形的に傾きつつある。第4図に示してある葺石においても40cm～20cmの数値的差が認められているので、やはり土堤と接しその線上にあることから西側は地形的に低い状況にある。配石は砾石として機能していたものであろう。

葺石は、左側壁外側にわずかと奥壁外側、右側壁外側、羨道の左外側に集中して残存していた。石材は、付近から産出している溶結凝灰岩、谷川から運び入れた入沢産のチャート・輝緑凝灰岩・硬砂岩・砂岩礫岩が混入していた。大半が拳大の10cm程度であるが中には15cm～20cm大のものも見られる。これ等の葺石は、封土の土留めとして下部より積まれていることが層序断面からも理解さ



第3図 五雲西12号古墳墳丘実測図（1：300）

れる。

封土を知り得る範囲は耕作のためほとんど見られないが、配石、葺石等を埋めこんでいた土層から判断すると、黄褐色を呈した基盤層に覆われて固く締っており踏み固めたことが伺える。

墳丘の規模の復元は推定の域を出ないが、石室を包囲する砾石の直径が5mを測ることと、奥壁の高さが地山から80cmを測ること、その上に存在したであろう天井石を考慮した場合、墳丘の高さは2m前後であると推測される。そして高さから判断して直径は10m前後であったと考えられよう。

第2節 石室

五雲西12号古墳は横穴式構造を呈し、石室の主軸方向は、N 20°Wを示しやや北西向きに構築されている。玄室の規模は、190~210cm×240cmを測り南北に長い長方形を呈しており、奥壁幅190cm、玄門幅210cmを測り玄門に向かってやや開いている。

奥壁は、幅2m、高さ1.5mを測る巨大な一枚石を立てている。左側床面上はこの一枚石が欠落しているため15cm~30cm大の石7個を積み傾斜を防いでいる。側壁東側は、幅160cm、高さ120cmを測る巨大石と、幅80cm、高さ50cmを測るやや小形の2枚の石を使用し、左右欠落の部分は小石で裏詰めしている。側壁西側は、幅125cm、高さ90cmを測る中形石と、幅95cm、高さ35cmを測る長方形の2枚石で整えられていた。これ等の石材は付近より豊富に産出する溶結凝灰岩を利用している。巨大石5枚で玄室を築いている古墳は、原石産地ならではの所産であろう。

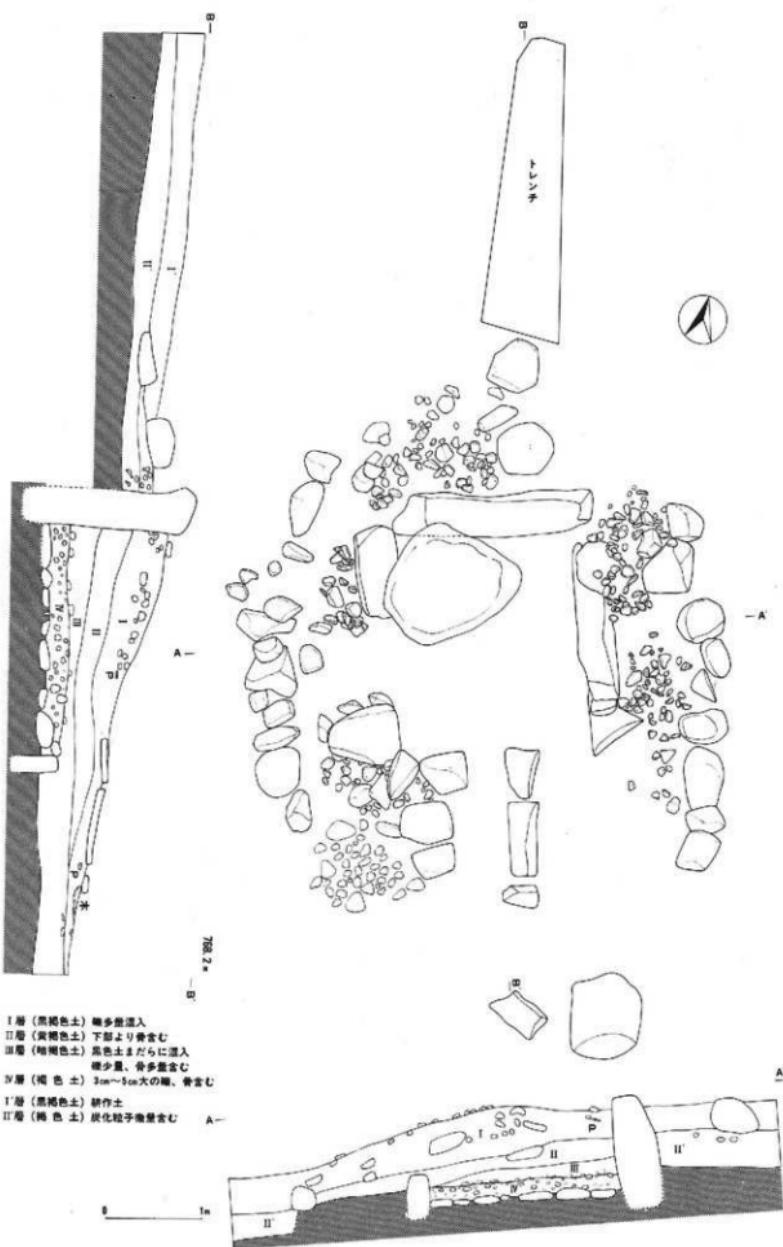
玄門は、入口中央に長さ75cm、高さ18cm、厚さ45cmを測る長方形の樋石が設置されていた。この樋石は10cm程地上に頭を出しており、地下に35cm埋められていた。また、西側には幅55cm、高さ130cmを測る方柱状の石が立てられていた。東側には見られず、この部分が空白であり東壁の裏詰め石がくずれ散乱していることから、上面を精査すると石が埋めこまれている形跡がはっきり認められた。閉塞石は影も形も見られないが、おそらく豊富に産出する溶結凝灰岩の一枚石を使用したとおもわれる。

羨道は破壊が著しかった。玄門から談門までの長さは約170cmを測り、側壁間の幅は1mを測る。東西両袖部には、三角形を呈した大きな一枚石が埋めこまれている。東側は95cm×50cm、厚さ45cm、西側は110×100cm、厚さ45cmを測り、表面は共に偏平である。この上部にさらに石を重ねたとおもわれるが取り除かれてしまっている。また、東側には長さ170cm、幅70cmを測る巨大な方柱状の石が横たわっており、おそらく談門の石であるとおもわれる。

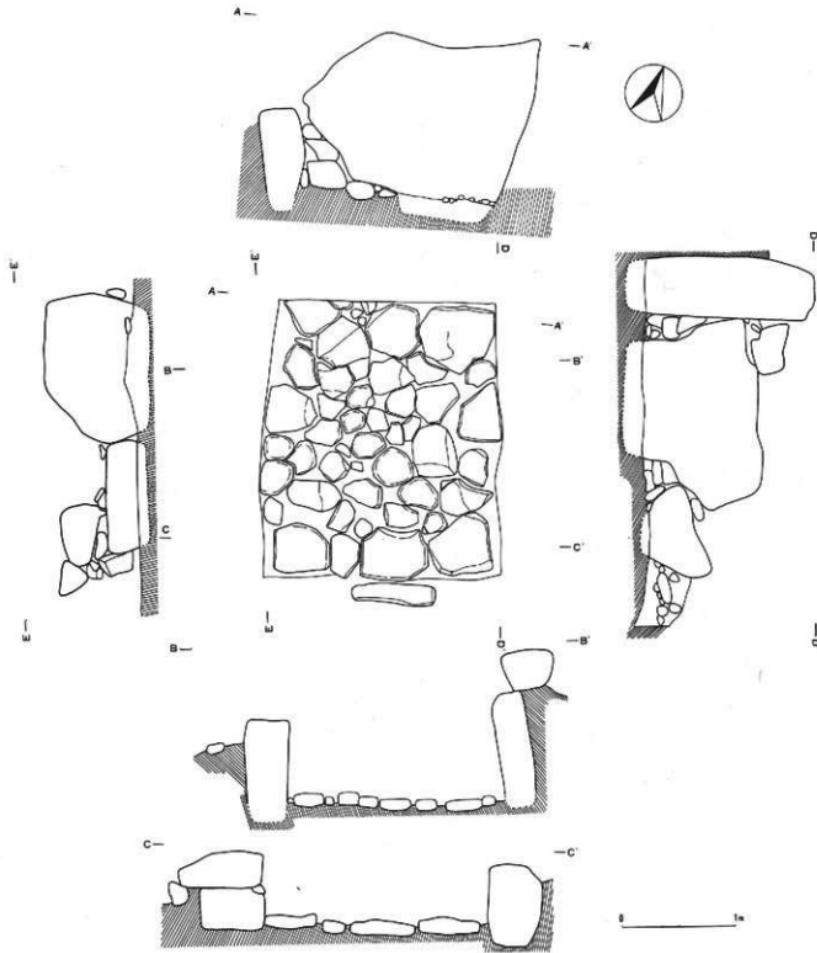
天井石はすでなく、調査開始直後の本古墳の上面を清掃した後の当初の面図第4図に示してあるように、奥壁から西壁にかけて140cm×120cmを測る三角形に近い石が残っていた。天井石の一部を割ったのではということも想定されるが、石材の豊富な場所柄であることから、新しい石材を求めた方が労力の面からもそう違いはなく、求めに応じた格好の石が得られるのではないかと考えられる。

床面は、追葬の状態からⅠ期（第5図）・Ⅱ期（第8図）に区分される。

第Ⅰ期玄室床面は、35cm×65cmを測る石を最大とし、15cmを測る石を最小として、佐久石の溶結凝灰岩を厚さ10cm~15cmに加工して40枚敷きつめ、ところどころに谷川から運んだ小さい河原石を間詰めに使用している。奥壁際、側壁際、玄室入口際等に大きな石を敷き、中央部はやや小形の石を使用し、見事な敷石状の床面を形成している。



第4図 墳丘・石室層序断面図及び葺石・礫石遺残状態図（1:50）



第5図 五雲西12号古墳第Ⅰ期の玄室（1:40）

談道の床面は、谷川から持ちこんだ5cm～10cmの大粒の河原石がバラまかれたような状態で敷きつめられていた。石質は、輝緑凝灰岩・硬砂岩・チャート・溶結模灰岩等である。玄室の敷石とは様相を異なる。

第Ⅱ期玄室床面は、Ⅰ期埋葬後あまり長い時間差が見られないことから、約10cm上部に築かれている。5cm～15cmの大粒の角のとれた石を無策為に並べてある。15cmの大粒の石は浮いたような状態であったが、5cmの大粒の石は埋めこまれたような状態を示していた。骨は、浮いた状態の大きな石に混じって出土した。大腿骨類の大きな骨は床面より10cm～20cm上部に出土している。

(第8図断面参照) 第Ⅱ期の床面は、Ⅰ期と比較して貧弱である。石質は溶結模灰岩が多く、チャート・輝緑凝灰岩も少量混入していた。

玄室内を覆っていた土層は4層によるが、天井石除去後に堆積した土層はⅠ・Ⅱ層で、特に上部Ⅰ層は、耕作時に投げ入れた礫や、墳丘を崩した時に出た葺石等を多量混入していた。骨はⅡ層最下部から出土をはじめたがⅢ層に至って多量となる。Ⅲ層は追葬が行なわれた時点～直後の埋土であるため、まだらに黒色土を混入していた。Ⅰ期床面からⅡ期床面を形成した覆土は、褐色を呈した地山層に3cm～5cmの大粒の礫を多量混入し上部に5cm～15cmの大粒の角のとれた礫を無造差に置き、覆土中には火葬にしたとおもわれる硬くて白い骨片が混じっていた。これはⅠ期の埋葬骨である。

床面は、Ⅰ期が中央から玄門にかけてやや高くなる。Ⅱ期はほぼ水平であった。

第3節 前庭部

五雲西12号古墳の前庭部は、柿の木が植えられさらに道路を建設した時に大きく削り取られてしまつたために検出は不可能であった。柿の木を切って調査に入る予定で、石垣を取りはずしにかかったが、上段を取りはずした時点で談道の西側辺が崩れそうになり、危険であるとのことから止むなくとどまざるを得なかった。

図上からの復元では、談門から東西2m、南北1mを測るが、南北は削り取られているためそれを考慮すると、東西と同様2mはあったと推測される。さらに土堤を南方に控えていることから、南側には階段があり古墳への上り下りには階段を利用したことと考えられよう。

(島田 恵子)

第4章 五靈西12号古墳の出土遺物

第1節 遺物の出土状態（第7～9図）

五靈西12号古墳の出土遺物は、刀子2、青銅製鉤帶具4、鐵鎌14、須恵器壺、蓋、高台付杯、土師器壺・土師器高台付杯各1が出土した。

第7図に器種別出土遺物分布図を第9図に遺物出土状態図を示したので、この2つの図を参照しながら、第Ⅰ期～第Ⅱ期の遺物出土状態を一瞥してみたい。

第7図の遺物分布図に見られるように、須恵器壺・蓋・高台付杯は羨道覆土、玄室西側トレンチ上部と高い位置において出土している。これ等はいずれも破片である。須恵器壺は接合した結果、第10図1に見られるように口～胴上部にかけて複原された。これ等の遺物は、第Ⅰ期あるいは第Ⅱ期に副葬品として埋葬されたものかは明かではない。耕作時に出土したものと破壊された古墳の上部に投げ入れたことも予想されるからである。第Ⅰ期・第Ⅱ期の遺物出土状態は埋葬された人骨と共にそれぞれの時期に形成された床面上において出土した。第Ⅱ期においては人骨の脛に出土し、埋葬に関して何等かの役割を果したものと考えられる。

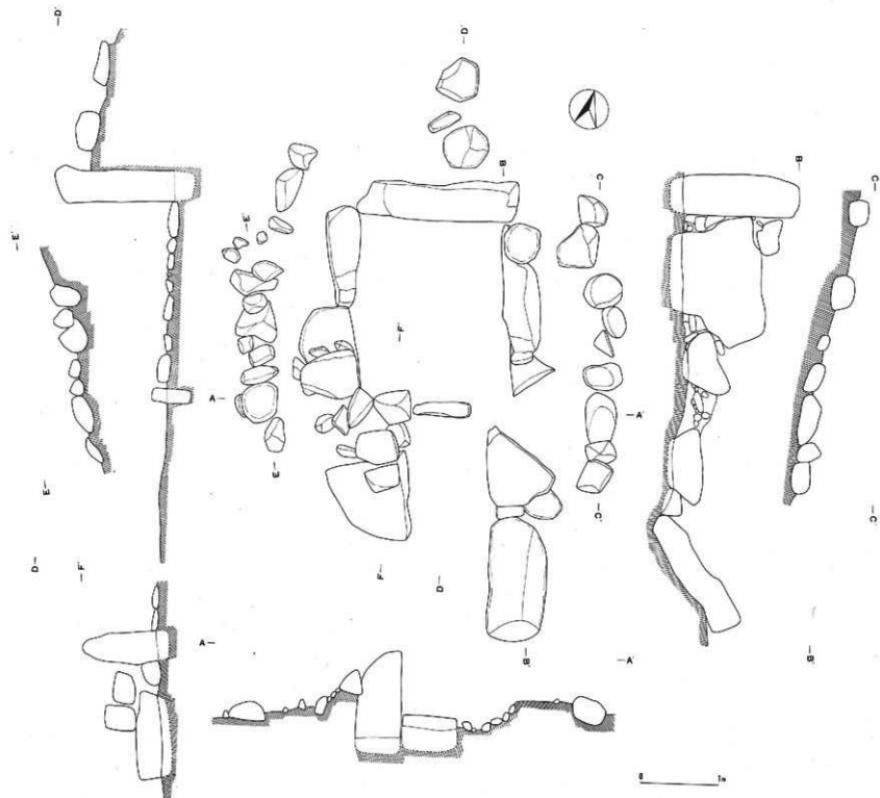
第Ⅰ期遺物出土状態（第7・9図）

第Ⅰ期の出土遺物は、刀子1、青銅製鉤帶具4、鐵鎌14等である。出土地点は、玄室入口の左右、左側壁際、羨道の玄門付近の右側に集中している。

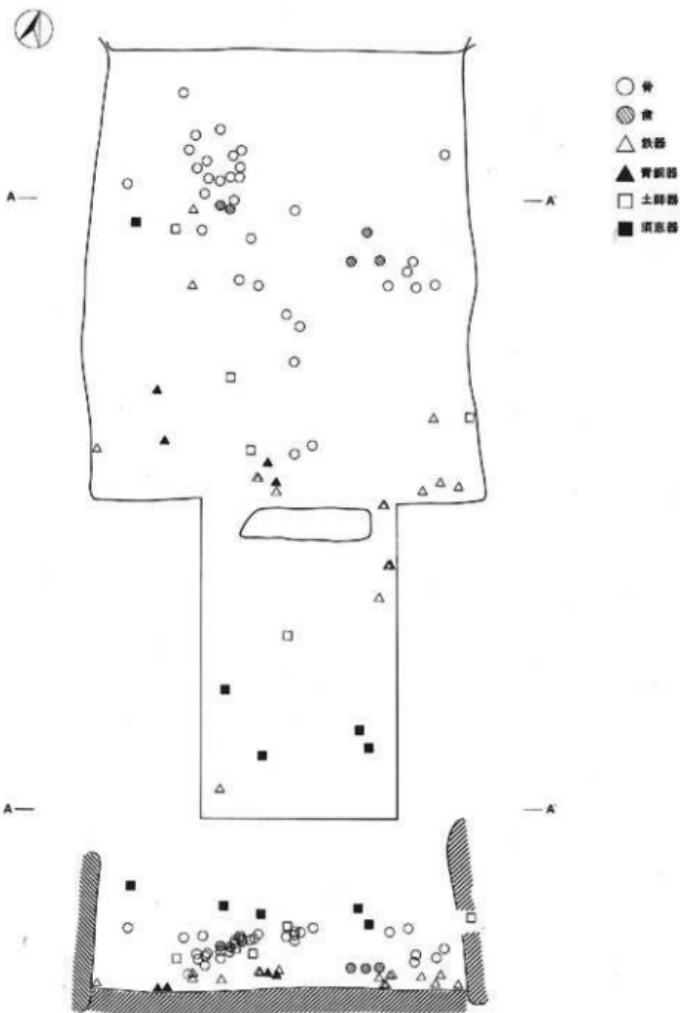
青銅製鉤帶具は、玄室左側の樋石付近から鉢具1、巡方1が出土し、側壁際からは丸柄1、巡方1が出土した。左側壁際の鉤帶具は床面直上において出土し、樋石付近から出土したものは床面より10cm上部において出土している。玄室入口右側より出土した鐵鎌は床面直上から10cm上部に出土し、羨道右壁下より出土した鐵鎌もやはり床面直上からである。鐵鎌は2本並べて敷石上部におかれていたものが3組あった。

骨は、火葬骨が玄室中央の覆土中より1cm～2cm大の骨片となって少量出土している。白味を帯びて硬く、第Ⅱ期の骨とは一見して判別できる状態であった。昭和61年清掃調査した臼田町蛇塚に所在する蛇塚古墳から出土した骨も全く同一の状態であったことから、当地方における奈良時代に埋葬された骨は火葬であるものと考えられる。火葬骨の鑑定は佐久総合病院整形外科町田拓也医長・口腔外科三沢常美医長にお願いしたが、調査団の判定と同一の見解が示された。

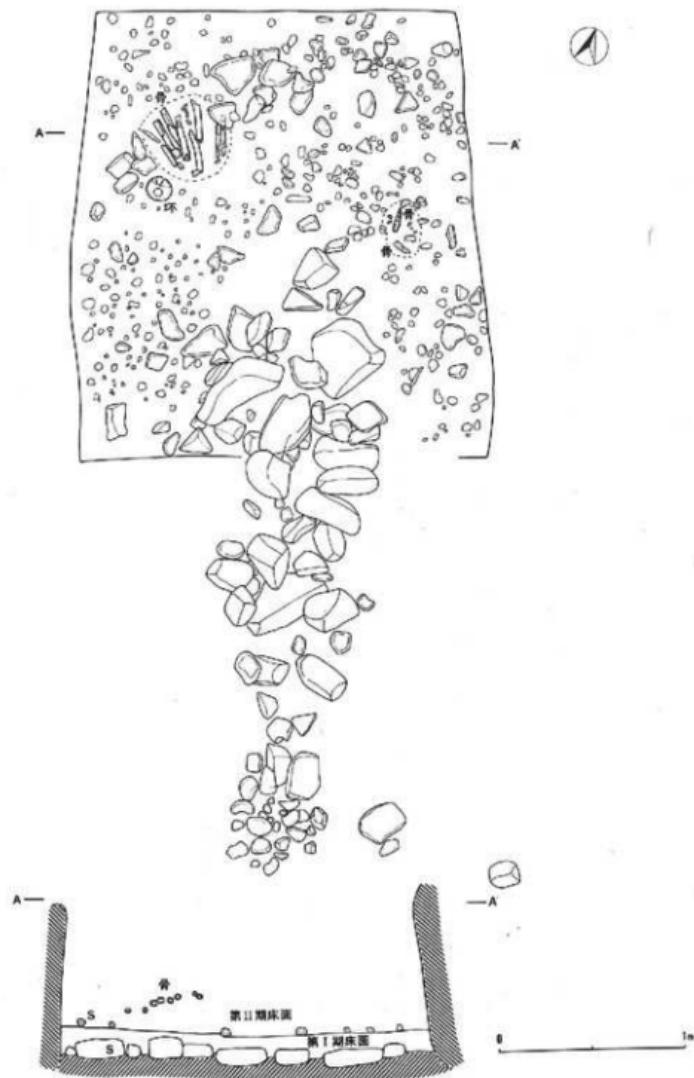
第Ⅰ期における土器類の床面からの出土は皆無であった。ここで問題となるのは、火葬骨をどのような蓋骨器に入れて埋葬したのかが課題となろう。骨の出土状態は第Ⅱ期床面を形成した覆土内に散乱混入していたのである。こうした状況から類例等によって判断した場合、木櫃があげられる。



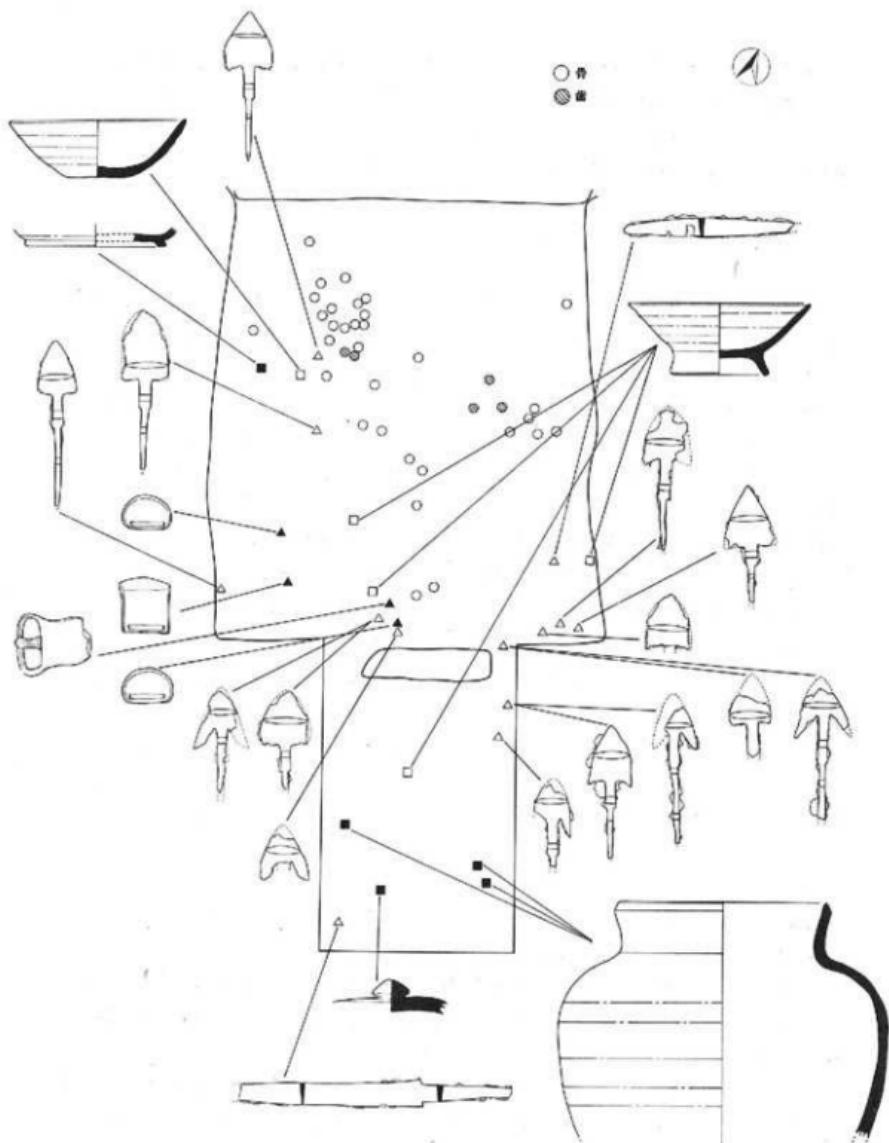
第6図 五雲西12号古墳の石室 (1:50)



第7図 五靈西12号古墳器種別出土遺物分布図 (1:30)



第Ⅱ図 第Ⅱ期床面遺物・人骨出土状態及び狭道の砾散布状態（1:30）



第9図 石室内遺物出土状態図

前述した当町の蛇塚古墳の清掃調査においても、木櫃とおもわれる木片が床面より出土している。また、奈良県天理市の仙之内火葬墓においては、木櫃の一部が残存していたことが報告されている。

第Ⅰ期埋葬骨が火葬であったということすら当地方における古墳調査では初見であり、今後の類例を待ってさらに検討する必要があろう。

第Ⅱ期遺物出土状態（第8・9図）

第Ⅱ期の出土遺物は、刀子1、内面黒色土師器杯1、土師器高台付杯1等である。刀子は、羨道中央の左側壁下より出土した。第Ⅰ期玄室内出土の刀子とは腐植の状態および形態、レベルから第Ⅱ期であると判断される。

内面黒色の杯は、骨集中区の脇に伏せた状態で出土した。破壊後の土庄によりおしつぶされていた。高台付杯は、4片の破片となって玄室に3片、羨道中央に1片（高台部）という状態に散らばっていたが、原形に接合できた。杯部のはほとんどが玄門入口付近の右側壁下にやはり伏せた状態で出土した。

骨は、大腿骨、上腕骨等が集中して出土した。（第8図参照）これは一見して生のまま埋葬したことが判別できた。褐色を呈し、もろくてくずれやすく、原形に近い状態を保っていたが取り上げる段階でかなりくずれてしまった。歯も出土したが頭の部分はすでにくずれて骨片となっていた。

以上が本古墳の遺物出土状態である。奥壁、側壁等の石が地面に露出していたことから、盜掘は免れないだろうと予想していたのであったが、幸いにも最少限に避けられており、貴重な出土遺物、埋葬状態等を把握することができた。30基存在すると言われていた入沢古墳が今回初めて調査され、その一部が明らかになり今後の地域研究における貴重な資料となろう。

（島田 恵子）

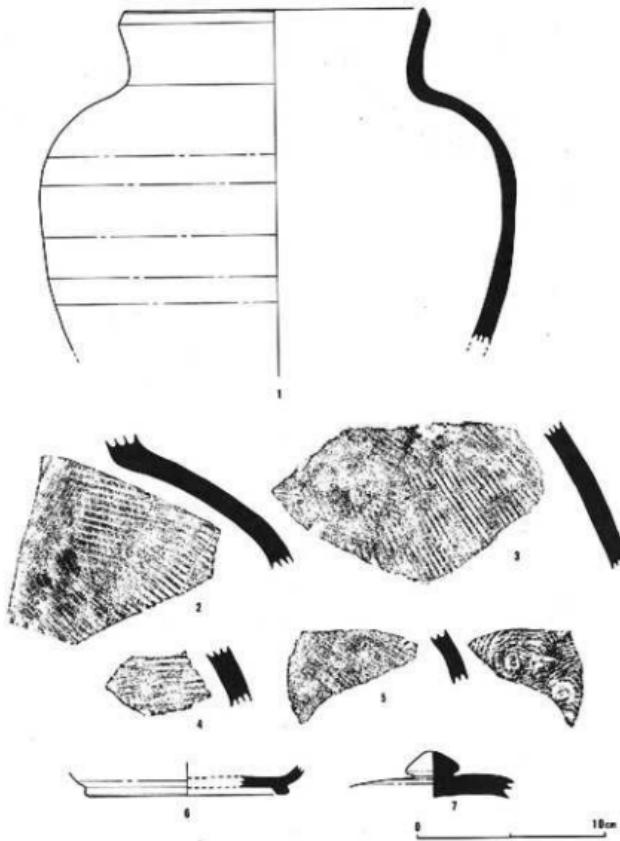
第2節 土 器

1) 須恵器（第10図）

須恵器は、玄室床面上部出土のものは皆無であり、出土状態の部で記述してあるように、天井石が取り除かれた後の墳丘に混入したものである。

1の壺は、口径16cmを測る。頸部の肩が大きく張り、口辺は直立に近い状態で立ち上っている。器面、内面共にロクロ調整のみである。器高は25cm前後あるとおもわれる。肩部に黒色の自然釉が付着している。

2は、大形壺の頸部から肩部にかけての破片である。頸部はロクロ痕が顯著で、肩部は平行叩目文が施されている。内面は指の圧痕が目立ちデコボコである。灰色を呈す。奥壁際の覆土内より出土した。

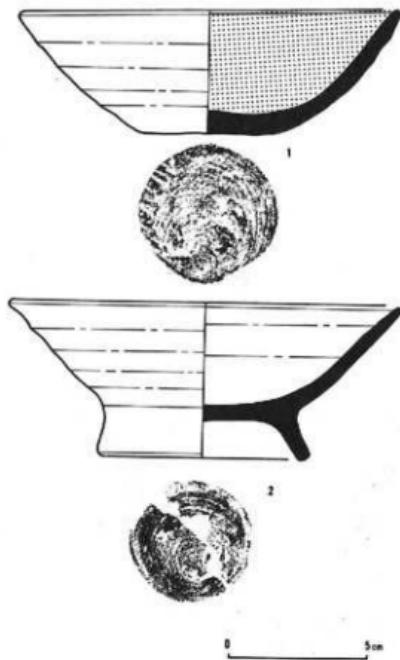


第10図 五靈西12号古墳出土須恵器実測図（1：3）

3は、大形壺の肩部破片である。平行叩目文が施され、内面はロクロヨコナデされている。赤灰色を呈し生焼けである。器厚は2より薄い。蓋道の覆土より出土する。

4は、平行叩目文と内面にヨコナデが目立つ細片である。明灰色を呈し、器厚は厚い。

5は、器面に平行叩目文が施され、拓影で示したように内面に同心円文が施されている。器厚薄く、灰色を呈す。4、5共に墳丘覆土より出土。



第11図 石室内出土土師器杯実測図 (1 : 2)

6は、高台付杯の底部片である。台部は、0.5 cmを測りかなり底く、僅かに開く。器厚薄く暗灰色を呈す。玄室の西側トレンチに出土。

7は、宝珠状摘みの蓋破片である。器厚は厚く、1 mm～3 mm大の小石粒が目立ち胎土があら。狭道の覆土下より出土。

2) 土師器 (第11図)

土師器杯1は、内面黒色研磨されている。底径は短く、糸切りが施されている。外面は2 mm～3 mm大の小石粒が浮き出てボコボコしている。

2は、高台付杯である。高台は、全器高の3分の1を占めかなり高い台部となる。底部は弱い糸切りが施されている。口辺部は直線的に大きく開いて外反する。器面は焼成時における赤色の斑点が一部に見られる。また、小石粒のボコボコが目立つ。内面はロクロの後ヨコナデされ器面に比してなめらかである。

第3表 五靈西12号古墳出土須恵器一覧表

単位cm

排番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
10-1	壺	16.0	口辺部直立気味に外反し端部三角形に突き出している。頸部大きく肩が張る	ロクロ痕	ロクロ痕	暗灰色

第4表 石室内出土土師器一覧表

単位cm

排番号	器種	法量	器形の特徴	調整(外面)	調整(内面)	備考
11-1	壺	13.5 4.5 4.8	口縁部より内湾気味に開いて立ち上る底径は短い。	ロクロヨコナデ 底部糸切り	内面黒色研磨	明褐色 胎土粗い砂粒
11-2	高台付壺	14.0 5.6 7.6	口縁部は直線的に開いて外反する。高台はかなり高い。器厚薄い。	ロクロヨコナデ 底部弱い糸切り	ロクロヨコナデ	内面褐色 外赤褐色胎土や粗い

上段口径・中段器高・下段底径

第3節 武器・装身具

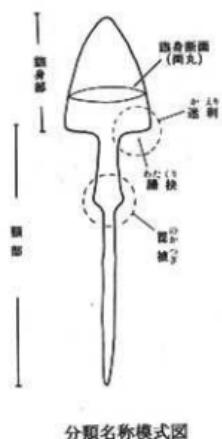
1) 鉄 鎌 (第12・13図)

鉄鎌は、本古墳初現期の副葬品として玄室・羨道において14本の出土があった。これ等の詳細は第5表に示したので、ここでは大略についてのみ記した。

鉄鎌は、1期床面直上～10cm上部において出土した。第9図においてその出土状態を明示してあるが、玄門入口付近に集中して出土し、その数は12本を数える。残り2本は玄室中央から1m左側において出土した。この2本の遺存状態は極めて良好で腐蝕も散少で1本は完形品で1本は鎌身部の端を一部欠失していたのみであった。

鉄鎌の型式分類は、従来、末永雅雄氏の研究による分類を使用していたが、ここでは埼玉県埋蔵文化財調査事業団の「研究紀要」に発表された『埼玉県における古墳遺物の研究』—鉄鎌について—の型式分類に従った。

先ず、型式分類に用いた名称について、簡略した模式図を参照されたい。



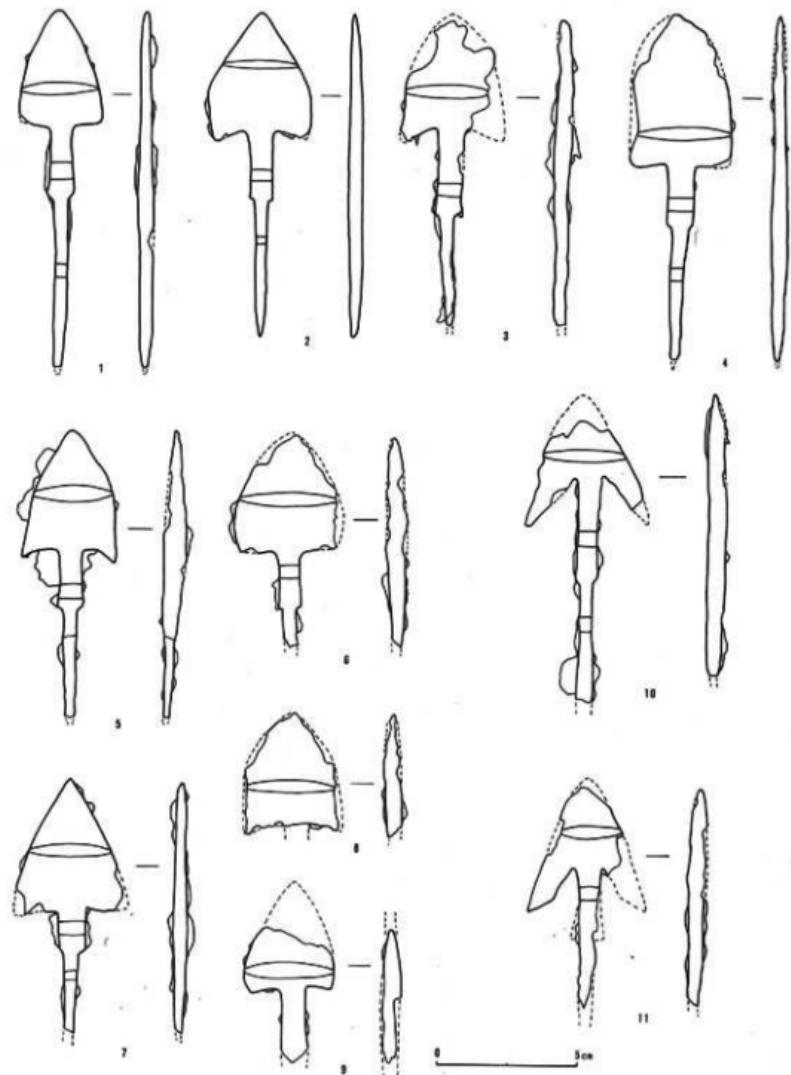
分類名称模式図

図示した本古墳出土の鉄鎌は、従来の末永氏の分類では平根鎌にあたる。鎌身部はその全てが三角形を呈しているが、その中に長脚を呈した長い三角形もある。第12図2・3・6が三角形を呈し、その他は長三角形を呈している。頭部は短頭と長頭があり、ここでは鎌身部が頭部の2倍以上あるものを長頭とした。大部分が頭部の先端部を欠失しているが、形態の類似したものと比較しながら復原を試みたが、1のみが長頭を呈している。また、鎌の断面は全て両丸である。さらに逆刺の腰抉は大きな抉りと小さな抉りが見られる。1～9が小さく、10～14がへの字状の大きな抉りを見せている。また、頭部笠被の関は全てに存在している。

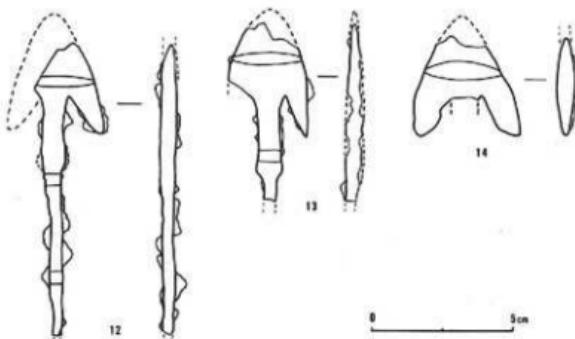
全体から、鎌身部の長さは、短いもので1の4.2cmを測り4.5～5.3cmの間に属するものが大半を占める。頭部の長さは端部欠失のため正確な数値は判らないが、2の完形品が7cmを測り、その他の現存値から推定して9cm前後であると考えられる。

2) 刀 子 (第14図)

第14図の刀子1は、羨道中央からやや左寄りの壁下より出土した。石の蔭であったため腐蝕はあまり進んでいなかった。切先端部を欠損しており刀身の現存部は14.5cmを測るが、完形刀身は17cmであろう。茎部は7cmを測る。刀部の断面は厚さ3.5mmを測り、茎部の断面は厚さ5mmを測り、刀部より厚くなる。全体に薄手である。



第12図 石室内出土鐵鎗実測図 (1 : 2)



第13図 石室内出土鉄鎌実測図No.2 (1:2)

第5表 五雲西12号古墳出土鉄鎌一覧表

押 国 番 号	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重 量 g	型式分類	備 考
11-1	玄室入口際の左端 頭(8.5)	根 4.2 頭 6.4~1.0	根 3.0 頭 0.5~0.6	根 0.4 頭 0.5~0.6	20	長頭鎌被脇抉両 丸造長三角	
11-2	玄室 左側	4.6 7.3	3.6 0.3~0.8	0.3 0.3~0.4	20	短頭鎌被脇抉両 丸造三角	
11-3	玄室入口際の右側	(4.6) (7.0)	(3.4) 0.4~0.8	(0.5) 0.5	16	"	
11-4	玄室中央の左側	5.3 (7.0)	(0.45) 0.3~0.8	(0.5) 0.5	30	短頭鎌被脇抉両 丸造長三角	
11-5	義道 右側	4.5 (6.0)	3.3 0.3~0.8	0.6 (0.5)	19	"	
11-6	玄室入口際の左側	(4.4) (3.4)	(3.6) 0.5~0.8	0.5 (0.5)	16	短頭鎌被脇抉両 丸造三角	11と並んで出土
11-7	玄室入口際の右側	4.7 (4.4)	(3.8) 0.4~0.8	0.4 0.3~0.5	17.5	短頭鎌被脇抉両 丸造長三角	
11-8	"	4.3	(3.3)	0.4	10	"	
11-9	"	(2.4) (2.7)	3.2 0.9	0.5 (0.4)	7.5	"	10と並んで出土
11-10	" "	(3.7) (8.0)	3.8 0.4~0.7	0.5 0.5	18	"	9と並んで出土
11-11	玄室入口際の左側	(4.4) (5.0)	(2.8) 0.4~0.6	(0.4) (0.6)	13	"	6と並んで出土
12-12	義道の右側	(3.2) (8.5)	(2.2) 0.3~0.9	(0.4) (0.4~0.5)	10	"	13と並んで出土
12-13	"	(4.1) (3.8)	(2.8) 0.4~0.9	(0.4) (0.4)	8	"	12と並んで出土
12-14	玄室入口際の左側	(3.6)	3.8	0.6	8	"	

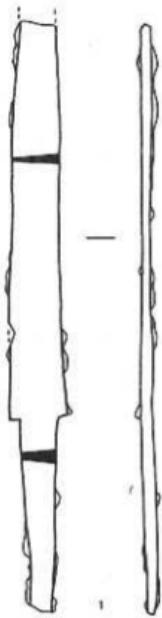
第6表 五霞西12号古墳出土刀子一覧表

() 現存値

	出土位置	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
10-1	談道床直上	身(14.0) 茎 7.0	身1.2~2 茎0.7~1.2	身0.35~0.15 茎0.5~0.25	40	薄手、腐蝕少ない 刀身端欠損 () 現存値 I期
10-2	玄室床直上	身 13.2 茎 —	身0.8~1.4 茎 —	身0.5~0.15 茎 —	17.5	厚手、腐蝕進んでいる 基部欠損 () 現存値 II期

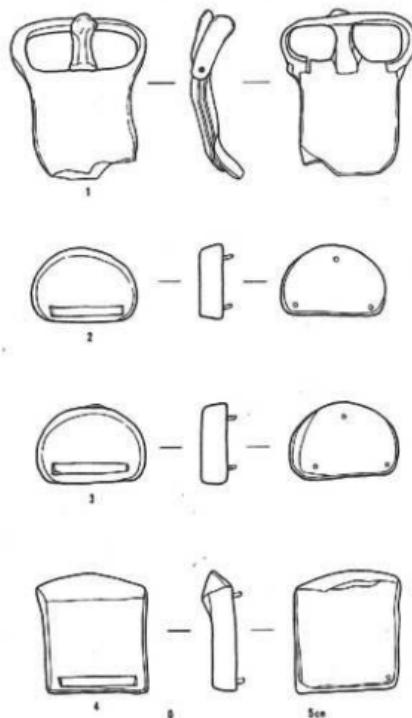
刀身は17cmであろう。茎部は7cmを測る。刀部の断面は厚さ3.5cmを測り、基部の断面は厚さ5mmを測り、刀部より厚くなる。全体に薄手である。

2は、やや小形となり現存刀身は13cmを測る。茎部を欠損している。玄門入口近くの右側床面上より出土、付近から鉄鎌も出土している。刀部断面は厚さ5mm~2mmを測る楔形を呈する。1に比較して小形ではあるが、2の刀子はやや厚手の作りとなろう。(鳥田 恵子)



第14図 石室内出土刀子実測図 (1:2)

5cm



第15図 玄室内出土鎗帶具実測図 (1:2)

3) 銚帶具〈帶金具〉(第15図)

銚帶具の出土状況は、玄室入口の左側、西側壁下寄り敷石床面に密着して出土した。西壁に面して北から巡方、丸柄と縦にならび、玄室入口の框石の内面西寄りに北から鉸具と丸柄がやや斜にならんで出土した。それぞれ近接した位置に置かれていたが、並び方の順序は不同である。鉸尾は発見されなかった。

第15図1の鉸具は、革帶の止め金(バックル)で青銅製。現在用いられているものと同型である。径約0.4cmの青どうの軸の両端に、横5cm、縦1.5cmの長円形の環をとりつけ、軸の中央に巾約0.8cmの青銅板を巻いて、その先端を尖らせ、長さ2cmの鉤とし、帶穴に刺しこんで円環で止める。この鉤を中心青銅軸に巾3.5cm、厚さ0.1cmの青銅板を通して二枚に折り曲げ、約4.2cmの長さにきちんと合わせ、この間に帯革をはさんで接続させたものと思われる。

鉤を止める円環は上面長径4.1cm、短径1.3cm、下面長径4.3cm、短径1.5cmで、鉤を受ける上面がしまり、体に接する下面が開いている。環は中央やや下面よりが厚く破をなし、上下両端が薄くなる。現在用いられるものとほとんど同型であるが、全体は太く堅牢な造りである。前面に黒漆が塗られていて、漆の剥落部には緑青が出ている。

2は丸柄で、帶金具(鉸)のうち円形のものをいう。上面長形(横巾)3.5cm、短形2.8cmの長円形の下端を短形(縦巾)2.3cmで水平に切断した円弧状をなし、下端の辺(弦)の長さは2.9cmである。この弧の低辺から0.2cm内側に横2.6cm、縦0.4cmの長方形の窓を切っている。下底は上底よりやや広く、窓はない。上底と下底の間の高さは0.8cm、内部は空洞で周壁の厚さは0.1cm、上底の厚さ0.1cm強で、やや底広の箱型に铸造されている。下底部は厚さ約0.5cmの同大の円弧の铸造板を3本の筋でとりついている。3本の筋の位置は、下辺直線部分の両端と円弧の上方中心部で、外周から約0.3cm内側に入り、上端は貫通して表面に現れている。筋の直径は0.1cm強、下底の弧の周縁は面取りが施されている。この筋の現状は下底の裏金の面で終っている。この筋によって革帶に装着していたものと思われる。色は全体に緑色を呈しているが、上底表面には赤褐色があり、その上に黒漆が塗られている。側面にも同様緑色の地に赤褐色と黒色部分が残る。赤褐色は黒色漆の下塗りに用いられた塗料と思われる。重量は20gを測る。

3の丸柄の形は2と全く同型である。上面横巾3.6cm、縦巾2.3cm、下底は横巾3.8cm、縦巾2.5cm、高さ0.8cmで、ほぼ2と同大である。重量は16gでやや軽い。鉸どめされている下底は板金は、強い打撃を加えられたものか左端が内側に曲がっている。前面に黒漆がよく残っていて、緑青色面は少ない。黒漆がよく残っているため、下底の板金を止めている筋の先端は外面に現れていない。

4は巡方で、方形の薄い箱形をなし、上面に長方形の透し窓を設けていて、形は異なるが構造は丸柄と全く同じである。上面横巾3.5cm、縦巾3.2cm、透し窓は横2.8cm、縦0.4cmの長方形、下底は横巾3.7cm、縦巾3.5cmでやや下底部が開いた箱形である。高さ(深さ)は0.8cm、側壁の厚さは0.1cm、上底部の厚さは約0.2cm、下底部は厚さ約0.1cmの青銅板を径約0.1cmの筋で4隅を固定してい

る。この裏金には面取りがみられる。この巡方は左上方で、下底部から強い力で圧力が加えられ、上辺側壁が反り曲げられている。重さは35g、前面に黒漆が塗られ、剥落部に緑青色が出ている。上底部はきれいだが、下底部は腐蝕が進み凹凸が多く、腐蝕孔もみられる。

(井出 正義)

第3節 五雲西12号古墳出土人骨

1) 人骨出土状態

人骨は、第Ⅰ期・第Ⅱ期追葬の2次にわたる各床面に遺残していた。先ず、掘り下げ順に出土状態を見てみよう。

第Ⅱ期追葬の人骨は、佐久総合病院整形外科町田拓也医長、同口腔外科三沢常美医長により鑑定及び御教示いたしました。その結果、11個の歯の選別により2~3体埋葬されていることが判明した。これ等の人骨と歯は、その出土状態を第8図に図示してあるが奥壁~左側壁コーナー付近に集中して出土したものと、その反対右側壁付近に集中しているもの、玄室中央に散らばっているものと、3箇所への集中が観察される。その内最も多量の骨が集積していた奥壁~左側壁コーナー付近の人骨は、大腿骨、胫骨が重なり合った状態で出土している。おそらく屈葬であったと考えられる。また、右側第一臼歯の上下の歯も並んで出土し、その他の骨もこの集中箇所より出土している。40ページ写真の人骨は全てこの箇所から出土したもので、同個体であることが確認されている。

また、右側壁付近より出土した歯は、第三大臼歯で別個体であることからここにも1体埋葬されていたことが伺える。さらに、ここから出土した2個の歯は、反対側の左側壁コーナー寄りの個体に属する歯である。このような同個体の歯が左右に別れて散乱していることは、後世古墳内が搅乱されたことが考えられよう。この他出土地点が図示されていない6個の歯は、覆土をふるいにかけて発見したものであるが層位的にみてⅡ期追葬時の歯であるとおもわれる。

人骨は、やわらかくてもろく取り上げる段階でくずれたものが多い。玄室中央から右側壁付近出土の骨は、1cm~2cm大の小さな骨片で早い時期の追葬であると考えられる。3体の追葬のうち最も新しい1体が頭の部分を腐蝕により消失して体の部分を遺残したのであろう。

Ⅰ期の人骨は、床面から10cm上部のⅡ期床面形成時点の覆土中に1cm~2cm大の骨片となって、主に玄室中央の奥壁寄りに出土した。これ等の骨は追葬の人骨と比較して、白くて硬いために、発掘調査の時点より調査団では火葬骨であろうとの見解を持っていました。しかし、古墳埋葬における火葬骨は類例が少ないと不安は残った。第4章(24ページ)においても記述したが、臼田町蛇塚に所在する蛇塚古墳出土の骨もやはり同様の状態で、藤手刀の出土等から奈良時代の最終末期古墳であること等、当古墳と築造時期も一致することが解り、前記の整形外科医長町田拓也、歯科医長三沢常美医師に両古墳出土の人骨を鑑定していただいたところ、調査団の判定と同一の見解が示された。佐久地方では、佐久市大字伴野に所在する休石遺跡からは須恵器大甕が発見され、甕の中に藏

骨器が入っており、付近から焼土・木炭なども発見されて火葬の場所が埋葬地とされたと判断される火葬墓が検出されている。時期は11世紀に比定されているが、五雲西12号古墳、蛇塚古墳は共に8世紀初頭であり時期的に古く、佐久地方においては貴重な資料となろう。

(島田 恵子)

1) 出土歯所見

佐久総合病院口腔外科医長 三沢 常美

下頬骨：発見された部分は左側の下頬枝の中央部分で、内側の下頬小舌・下頬孔（下歯槽神経の下頬骨への侵入路）が明確にみられる。筋突起、関節突起、及び頸角部へ続く部分は失なわれている。注目すべきは下頬枝の厚みが、現代人に比較して2～3倍も厚く、下頬骨全体としても大きなものであったと予測されることである。

歯牙所見：歯牙は、右下顎第一小白歯1本、同第二小白歯1本、同上下第一大臼歯各1本、右下顎第二大臼歯2本、左下顎第二大臼歯1本、第三大臼歯（部位不明）が4本であった。

このうち下顎第二大臼歯が複数あること、第三大臼歯の咬耗のみられるものと、石灰化が未成熟と考えられるものがあることから、少なくとも21個体以上の歯牙が混ざっているものと考えられる。

従って歯の大きさ、双同性、咬耗面の一一致を詳細に検査すると、第一グループは、右下第一小白歯から第三大臼歯まで（歯式では87654|）及び右上第一大臼歯、第三大臼歯（歯式では86|）であり、歯は現代人に比較してやや大きい感があり、咬耗も激しく特に上顎第一大臼歯の頬側咬頭が咬耗している特徴がある。咬耗は第三大臼歯にもみられ、少なくとも歯牙年齢からすると20才以上と考えられた。

第二グループは下顎の両側第二大臼歯(7|7)で、第一グループのものより小さく、表面の着色等からは、やや違う年代のものかと思われた。左右の歯牙は対称型で咬耗は第一グループのものよりも程度が軽い。

第三グループは、咬耗のない第三大臼歯の2本で(8|8)かと推測される。いずれも萌出前か直後のもので咬耗はみられず、石灰化も悪いようである。第三グループは第二グループのものと同個体である可能性はあるが、直感的には第三グループの歯牙の方が新しい時代のように思える。

最初に述べた下頬骨と比較して最も同一個体の歯牙と考えられるのは、第一グループのものである。大きさ、咬耗の程度から頑丈な下頬骨が想像される訳である。また、第一グループの5|にはう蝕と考えられる部分が咬合面に見出される。

この個体では、先にも書いたとおり現代人よりはるかに発達した下頬骨を有する事、大臼歯の咬頭の広範な咬耗がある事から、当時の食物、食生活における日常的硬固物咀嚼が推察されよう。



五靈西12号古墳Ⅱ期出土人骨

2) 出土人骨所見

佐久総合病院整形外科医長 町田 拓也

大腿骨・胫骨の横径からみて骨太であり男性の骨格と思われる。大腿骨骨幹部と大腿頭部、上腕骨骨幹部と上腕骨骨頭の相対比から類推して大柄な逞ましい体格と思われる。

長管骨骨皮質の厚み、緻密さからみて（骨皮質が厚く緻密で、骨成長の完結を示すとともに、高令者にみられるような骨萎縮がみられない）成・壮年者の骨格と思われ、歯の第一グルーブと同個体であると考えられる。

身長に関しては、体幹に関連した脊椎、骨盤の骨格を欠くために予測はつきにくい。上腕骨骨頭、大腿骨頭部の形態と長管骨横径を基にした想像では、170cm～180cm位ではないかと推測される。

第7表 五霊西12号古墳Ⅱ期出土人骨一覧表

骨番号	骨 部 位	左 右	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	備 考
1	大 腿 骨	右	24.5	2.8	
2	"	左	23.0	3.1	
3	大 腿 骨 下 端(頭部)	—	3.5	5.3	
4	胫 骨	左	12.4	3.8	5と接続する
5	胫 骨	左	20.0	3.3	4と接続する
6	胫 骨	右	24.0	3.8	
7	踵 骨(かかと)	右	6.5	2.8	
8	下 頸 骨	左	4.0	3.5	
9	鎖 骨	—	4.5	1.4	
10	肋 骨	—	5.2	1.3	
11	上 腕 骨 頭	—	5.0	4.2	
12	上 腕 骨	—	16.9	2.4	
13	腓 骨	—	12.3	1.8	
14	腓 骨	—	7.3	1.6	
15	胫 骨	—	8.2	2.8	
/	肩 甲 骨	—	4.2	3.6	写真にない

第5章 考察

第1節 五靈西12号古墳の構造

入沢古墳群は、山際地籍に3基、権現通り地籍に3基、月夜平に1基、五靈西に5基、天神平、西ノ窪地籍に7基と計19基の古墳から成る。19基という数の群集墳は歴史的にかなり多い群集墳であるといえよう。

臼田町内の古墳群を概観してみると、合計49基の古墳の内、千曲川左岸に46基あり、そのほとんどが大奈良・田口・入沢地区に所在している。第2図に入沢古墳群を図示し、第17図に臼田・大奈良・田口に所在する古墳群を図示した。先ず、千曲川左岸に所在する古墳は、臼田善阿弥地籍にある境塚古墳、臼田蛇塚地籍にある蛇塚古墳、臼田淹ノ沢にある淹ノ沢古墳の3基である。この内蛇塚古墳は昭和61年度清掃調査をおこない、藤手刀、刀子、鉄鎌、鎌、骨、須恵器などが出土し、古墳の内容についておおよそのことが判明している。

千曲川右岸の大奈良には17基の群集墳が所在する。先ず離山地籍に3基、清川・山崎地籍に各1基、幸神に6基、外九間に3基、中原に3基である。田口の下町地籍には、割堀・明法寺・五庵に各1基、宮代の英田地畠地籍に2基、宮東に2基、上宮代に2基と計9基を数える。また、岩水舟久保地籍に1基、行政区が違うが隣接した曾原に1基あり、舟久保20号古墳と共にこの地区で2基の群集墳としてとらえられよう。

このように臼田町の群集墳は大きく分けて、臼田・大奈良・田口・入沢・岩水の5地区にまとまっていることが判る。その内19基を数える入沢古墳群が歴史的に最大の群集墳である。こうした数多くの古墳がありながら、その構造、時期、被葬者等なにも解明されないまま今日に至り、古墳は次第に耕作等によって取り除かれたり、周囲を削り取られたりと破壊がはげしくなる一方であった。そんな折、緊急調査ではあったがこの群集墳の一つにメスを入れて学術的な解明が成された意義は極めて大きい。

五靈西12号古墳は、南面する緩傾斜面に築造された横穴式古墳である。付近より豊富に産出する溶結凝灰岩（佐久石）の巨大な一枚石を使用し、地山を50cm程掘りこんで一枚石を埋めこみ、同じ石材を薄く削り敷石状の床面を形成している。框石は50cmを測る厚さで長方形に削り形を整えてある。玄門には方柱状の石を立て両袖型の形態がとられている。玄室は2m×2.3mを測る方形を呈し、玄門付近に向ってやや開いた形状を呈している。

墓道は破壊が著しく、明確な構造は解りにくいが、玄門から狭門まで170cm、幅1mを測る規模であった。狭門の石は右側に長さ170cm、幅70cmを測る方柱状の巨石が横たわっていた。前庭部は枯の木が植えられていたことと、道路建設により大きく削り取られており、おおよその範囲を想定する

第16図 日田町古墳分布図No.2 (1 : 25,000)



第8表 白田町古墳一覧表No.2 (遺跡詳細分布調査団作成一覧表より)

古 墳 名	所 在 地	立地	遺 構	備 考
1 境塚古墳	白田 善阿弥	丘陵	径9~11m	
2 蛇塚古墳	白田 蛇塚	平地	横・円(径10m高2.5m玄室(長4.8m3.0×0.95)表土1.9m手刀・刀子、銅鏡、鏡、骨、須賀(須賀)古墳周辺出土)	昭61年度清掃調査
3 滝ノ沢古墳	" 滝ノ沢	尾根	円 (径15、高2)	
4 離山1号古墳	大奈良 離山	山腹		現在薬用人参畑痕跡なし
5 " 2号古墳	" "	"	横・円	南斜面、青木家の下
6 " 3号古墳	" "	山麓	"	北斜面下、有賀秀雄氏屋敷地
7 清川入古墳	" 清川	山腹	天井石、玄室側壁、表土側壁・円	千野氏墓地
8 山崎 "	" 山崎4758	平地	煙と水田の境に高さ1mの封土が残っている	新海神社地
9 幸神1号古墳	" 幸神	"	横・円(径12m、周囲36.5m、玄室36×32)須賀大應破片	新海神社地
10 " 2 "	" "	"	横・円(径9m、玄室2.4×2.2)	"
11 " 3 "	" "	"		柳沢塹設土墓の東側に僅に残る。新海神社地
12 " 4 "	" "	"	横・円(径6m、周囲18m、大井石僅か残)	新海神社地
13 " 5 "	大奈良幸神4803の1	"	墳丘径東西7m、南北5m、高さ2m	
14 " 6 "	" 幸神4803の1	"	墳丘径東西7m南北5m高2m	
15 外九間1	" 外九間	平地	横・円(6m、周囲24m、高1)	新海神社地
16 " 2 "	" "	"	横・円(径12m、玄室完存、2×1.7、高1)	"
17 " 3 "	" "	"	古墳かやっくらか判別困難	"
18 中原1	" 中原	"	横・円(径8~12m、周囲36m)	"
19 " 2 "	" "	"	横・円(径8~11m、周囲30m、高2)	"
20 " 3 "	" 中原5132	"	昭和41年新築製作所設立の際にこわし建物跡地とされた	新海神社地19nf
21 割塚 "	下町 割塚	"	横・円(玄室横巾2)	
22 明法寺 "	" 明法寺	"	横・円(奥巣石、天井石)	
23 五庵 "	" 五庵	"	横・円(側壁石2m、玄室巾2.5)	
24 英田地畠古墳	宮代・英田地畠	山麓	門・横(32.0、巾1.0)手刀1、表刀1、銅鏡10、銅鏡品4、三輪12、土器、鏡	昭40年発掘調査現在畠地化寸
25 新海神社西御陵古墳	" "	"	円・横(径7.5m)玄室(長2.1、巾1.9)	新海神社地
26 新海神社中御陵古墳	" 宮東	"	円・横(径8.5m、高2.1)玄室(長2.4、巾1.6)	"
27 新海神社東御陵古墳	" "	"	円・横(径6.5m、高2.1)玄室(長1.9巾1.8)	"
28 上宮代1号古墳	" 上宮代	平地	径9.1m、高2.1古墳かどうか疑問	観察では判定困難
29 " 2 "	" "	"	円、現在は五輪塔が置かれているだけ	"

円は円墳、横は横穴式構造

にとどまった。

また、石室周囲には縞石と考えられる河原石が東西および奥壁外側に並列していた。これ等の石は巨大な一枚石を埋め込んだ周囲への補強のためであることも考慮される。天井石はすでに取り去られてしまっていたが、おそらく奥壁に匹敵するような巨大石を使用したものと考えられる。

本古墳は、巨大な一枚石を5枚使用して石室を築いていることが特徴としてあげられる。また、緩傾斜面を設計の段階でうまくとらえて構築していることも、標高760mを測る高地性の山間地での古墳群の在り方をあらわしているといえよう。

(島田 恵子)

第2節 五雲西12号古墳の出土遺物

1) 土器

出土した須恵器は、壺、高台付杯、蓋等の器種である。この内、玄室西側トレンチより出土した須恵器高台付杯は、底径11cmを測る。底部の器形から奈良時代に比定されると考えられる。出土地点は床面から60cmの高さにあり、副葬品とはおもわれない。投げこまれたものであろう。

土師器杯は追葬された第Ⅱ期床面上から、伏せた状態で出土した。大腿骨等の骨の際より出土した内面黒色の杯は、底径が短く糸切りが施されている。また、器高も短く、平安時代前期に比定される器形である。

高台を呈した杯は、玄室右側壁付近からやはり伏せた状態で出土したが、高台の部分がやや分散していた。高台は全器形の3分の1を占め、当地方においてこれ程高い台部を有する高台付杯は類例が少ないのである。佐久市伴野に所在する舞台場遺跡のグリッド出土遺物に同様な高台を有する杯が出土している。土師器高台付杯は、須恵器高台付杯が消滅して後の平安時代前期後半より出現する。小海町雨堤遺跡H1号住居址、佐久市岸野西裏・竹田峯遺跡第14号住居址から高台付杯が出土している。両遺跡の各住居址は、平安時代前期～前期後半に比定されている。既出遺物では、佐久町畠ヶ中の丸井戸遺跡・館遺跡より本古墳出土のものに酷似した土師器高台付杯が出土している。(註内面黒色高台付杯は除外した)

以上により、出土した土師器杯は、内面黒色が施された第11図1が平安時代前期に2が平安時代前期後半～中期の所産であると考えられる。

2) 鉄鎌

五雲西12号古墳より出土した鉄鎌は14本を数え、その全てがⅠ期の副葬品である。型式分類によると鎌身部は三角形を呈し、少數ではあるが長三角形を呈しているものもみられる。頭部は短頭がほとんどで、長頭と思われるものが1本みられた。鎌身の断面は全て両丸を呈している。また、逆刺の脇抉は大きな抉りと小さい抉りとに区分され、頭部籠被の関は全てに存在していた。佐久地

方における古墳時代の住居址からは、鉄鎌の出土はほとんど見られていない。しかし、奈良時代に入ると同時に住居址からの鉄鎌出土は顕著となる。これは、鉄鎌製造の技術が一般にも普及してきたことの表れであろう。本古墳出土の鉄鎌は、他の伴出遺物から奈良時代に否定されると考えられる。

(島田 恵子)

3) 鉄帶具

「鉄帶出土の意味」

鉄帶はその出土が少なく、出土地は古墳、官衙址、大集落址等に発見されることが多く、円面鏡、施袖陶器、鉄製品などと共に特殊遺物として注目される。特に鉄帶、石帶は官位に関係するものとして重要視される。鉄帶とは鉄という金具を飾った革帶のこと、古く北アジアや中国ではじまつた。日本では4世紀末～6世紀初の古墳から、竜文や忍冬文などを透彫りにした金銅製の鉄が短甲や桂甲に鋲びついて出土する。そこで5世紀の武人は肩庇付冑を被り、短甲或は桂甲を着て、腰に金銅製の鉄板をつけた帶をしめていたと想像される。須坂市上八町の鎧塚古墳群(県史跡)の第1、2号墳は県下最大の積石塚であるが、昭和32年の発掘調査で第1号墳から金銅製頭子噛み文を鉄出した3枚の鉄板が出土した。これは高勾麗古墳出土例に近いもので、この古墳と渡来人との関係が考えられている。しかし、6世紀初めには肩庇付冑と鉄帶は急速に消滅して、金銅製冠、金製耳飾、金銅製帯等がこれにかわり、支配者像の変化がみられる。

大化改新(645)により天皇専制の古代国家が成立し、中央・地方の官制が整い、位官が制定されると、官人が位階に応じて鉄帶を用いるように法制化された。

「五雲西12号古墳の鉄帶の時代と被葬者」

養老令(718)の「衣服令」に金銀表腰帶は五位以上、六位以下は烏油腰帶、無位の者は烏油の腰帶とある。烏油腰帶は銅鉄に黒漆を塗った黒色の鉄を用いた鉄帶(腰帶)と考えられるから、奈良時代には黒漆を塗った黒色の銅鉄を用いていたのは、六位以下の官人か、無位の有力者ということになる。即ち五雲西12号古墳から出土した銅鉄は遺物の項に記したように、この烏油腰帶のものであって、五雲西12号古墳に最初(1期)に葬られた人物は六位以下の官人か、これに準ずる有力者だったということになる。

平安時代はじめ延暦15年(796)に鉄帶を前面的に禁止した。これは錢貨の鑄造に支障を来たさな



第17図 鉄帶模式図(大和市教育委員会「月見野遺跡群上野遺跡第1地点」報告書参考)

いためだとある。(「日本記略」) それ以後は金銀銅の鈔帶にかわって石製の鈔帶が用いられるようになる。その後大同2年(807)に雜石帶が禁止されたが、弘仁元年(810)には再び雜石帶が用いられる事となった。(「日本後期」九月乙丑条)。したがって律令制に於て正規に鈔帶が使用されたのは奈良時代710年代から平安時代初頭延暦15年(796)までと、大同2年(807)から弘仁元年(810)までの期間に限定されることになる。

鈔帶は帯の止め具である鉸具と、尾端の金具の鉢尾と、その中间につける飾り金具である巡方と丸柄の4種の部品からなる。帯に着装されたままの出土例がないからその構成を知るのは困難であるが、正倉院御物の紺玉帶残闕は鉸具1、巡方3、丸柄7、鉢尾1となっている。長野県内の出土例をみると、松本市新村の安塚古墳群2号墳で青銅丸柄1、茅野市永明の姥塚古墳で青銅丸柄2(図が残っているだけ)諏訪市大熊の双子塚古墳で石製巡方2の出土が知られているだけである。他は住居址等で単体出土が数例あるに過ぎない。佐久では佐久市前田遺跡の1号住居址から銅鑄巡方が1個出土しているだけである。大和市文化財調査報告書第21集「月見野遺跡群上野遺跡第1地点」によれば、関東地方に於ける銅鉢、石鉢を含めての出土遺跡77、出土個数174のうち、住居址出土、古墳出土いずれの場合も1遺跡出土数は1~2個体であって、これは、鉢が欠落したものと考えるより、出土地だけの数の帯があったと考える方が自然であると書かれている。これらの例からみれば、五雲西古墳の鈔帶は鉸具1、巡方1、丸柄2を装着した鈔帶で、4点の鉢が検出されたことは信州や関東地方では、むしろ稀にみる多數出土例であるといえる。

鉢の大きさと官位の関係について前記大和市の報告書は、阿部義平、佐藤興治両氏が復原した案によって、巡方について次のように比定している。阿部氏、佐藤氏の順で記すと六位3.9cm~3.6cmと3.9cm、七位3.3cm~3cmと3.3cm、八位2.7cm~2.4cmと2.8cm、大初位2.1cmと2.3cm、少初位1.8cmと2cm、無位1.7cmとする。これに対して五雲西12号墳出土の巡方は上面横巾3.5cm、縦巾3.2cmであるから七位に該当することになる。七位の相当官職は国司の第3位の據で、守、介に次ぐもので、目の上に位する。この国司の四等官は中央から派遣され、国府に居住して国内の行政、警察、司法をつかさどり、任期4年であったから、佐久郡青沼郷の古墳にこのような国府の官人が葬られたとは考えられない。他に地方に關係ある官人とすれば郡司である。郡司は国司の監督下で郡内の統治にあたったが、それは地方豪族のうちから有力で才能のあるものが任ぜられ、大領(長官)、少領(次官)と事務官としての主政、主張があった。郡司は国司とちがって地方土着の豪族で、任期のない終身官で世襲された。しかし律令の官位令には郡司の官位は規定されていない。つまり郡司は官位相当職ではないのである。大宝令では外位を設けて郡司ら地方豪族に与えた。六位以下の郡司は路上で国司に遭ったときは、その位のいかんにかかわらず、下馬して敬意を表さなければならぬと定められていた(「儀制令」)。しかし郡司は大領6町・少領4町、主政・主帳2町の職分田が与えられ、その子弟は国学への入学が可能で、官吏登用試験を受けられた。左右兵衛府の兵衛(兵士)や妾女(女官)を貢進し、中央政府とのつながりをもった。選競令では大領が外從八位上、少

領が外從八位下に任せられることになっている。奏源宏氏「九世紀以前郡司一覧表」によれば東国の郡司はおおむね六位から八位の官位が多く、中には無位の主帳が郡司となっているものもある。このようなことを考え合わせると、地方で出土する鉢帯の多くは郡司層が所有していたものとしてよいことになる。しかし衣服令等には外位の者に関する鉢帯の規定はないので正確には知ることはできない。

鉢帯は本来朝廷が与える官位に關係し、その權威や地位を象徴するものであるから、鉢の大小、つまり帶巾がその位階の高下に比例し、鉢の製作、管理は官に掌握されていたと考えられる。しかしこれには多くの疑問がある。前述のように鉢の出土状況は単品または少數出土が多く、鉢の着装が変則的になされていたと思われる。関東地方では普通の堅穴住居址からも出土している。9世紀以降宮によって鉢の供給が止まった後は、掘立柱建物や大形堅穴住居などで、地鎮や鎮壇具として利用した可能性がみられるという。官位の象徴として鉢帯のもつ權威が、宗教的、祭祀的因素として利用されたものと思われる。日本後記弘仁元年九月乙丑条に「雜石帶はこれを造って売る人が多いから得やすくて、破損し難いのにくらべ、銅鉢は漆を塗っているので剥落しやすい。しかも値段は同じである」と書かれていることは、石帶も鉢帯も必ずしも官給品でなく売買が行われていてこれが推察される。日本靈異記中巻第二十二話に、聖武天皇の御世に寺の銅や仏像を盗みだして、帶（鉢帯か）に作って道路ばたの家でならべて、売ることを常の業としていた男のことが記されていて、鉢帯や石帶が街で売られているさまが想像できる。都にのぼった地方豪族の中にはこのようなものを買って持ち帰るものがあったかも知れない。このように地方出土の鉢の解釈については複雑なものがあって、その入手過程や着装者の身分については断定し難いものがある。しかしたとえ不規則ではあっても鉢帯を持てできた階層は、有位者か、或はそれに準ずるような有力な階層であったことはまちがいないであろう。

入沢五靈西12号古墳出土の鉢帯について言えることは、その出土した鉢の種類が鉢尾を欠くだけで、鉢具、巡方、丸柄2とほぼ一帯分の種類がそろっていること。鉢が比較的大形で、つくりもしっかりしていること等が上げられ、それぞれ古墳の副葬品であるという性格からみて、この鉢帯の着装者が被葬者で8世紀代即ち奈良時代の人であり、七位ていどの官位をもつか、或はそれに準ずるような有力者で、入沢に在住した地方豪族であったと推定される。

鉢帯から推定される被葬者の官職は外六位か七位の大領級ということになる。しかし佐久郡衙はその地理的歴史的条件や現在までの発掘調査の状況等からみて、佐久市域内に比定されるので、佐久郡司が入沢に居住していたと考えることには無理がある。入沢は当時佐久平米作地帯の川東地区の最南端部を占め、古墳群を形成している。青沼郷はここを拠点としてさらに南方の開拓をすすめるという重要な位置にあったものと思われるから、ここに郷長のような有力者が居住していたことも考えられる。この古墳の被葬者が火葬されているのは、すでに仏教信仰を深くもっていたものと考えられ、文化的にも中央の影響を受けていたものと思われる。日本靈異記下巻第二十二話には、信

^{†1/5} 濃國小県郡^{†1/6} 姫の里（現海野）の大伴連忍勝は氏寺をつくって、大般若經六百卷書写の願を発していたが、宝亀5年（774）3月、他人の中傷によって同族のために殺された。そこで身内の者が相談して、殺した者を殺人罪として裁いてもらおうとめた。そのためすぐに火葬にはしないで、墓地を選定して死体を祭っておいたら、大般若經書写の功德によって5日後に生き返ったという説話がのせられているが、この話から奈良時代には信州の豪族たちの中にも仏教信仰がかなり広まり、それらの豪族層の間では火葬もかなり普遍化していたことが想像できる。入沢五靈西12号墳の被葬者も、このような地方有力豪族であったことはまちがいない。五靈西12号古墳出土の鉢帯と被葬者の火葬骨はこれから佐久の古代解明の上に重要な資料を提供するものである。（井出 正義）

註 本稿作成にあたり、柳田敏司先生還暦記念論文集埼玉の考古学、井上尚明氏「鉢帯をめぐる二、三の問題」、大和市文化財調査報告書第21集「月見野遺跡群上野遺跡第1号地点」等を参照させていただいた。また長野県史編纂委員宮下健司から県内古墳出土の鉢帯について、佐久市教育委員会林幸彦氏からは佐久市出土鉢帯についてそれぞれご教示をいただいた。あわせて厚く御礼を申し上げます。

第3節 五靈西12号古墳の被葬者

本古墳に埋葬された被葬者は、第Ⅰ期奈良時代、第Ⅱ期平安時代前期～中期の2次期にわたって数個体が埋葬されている。

先ず、第Ⅰ期奈良時代についてみてみよう。奈良時代は火葬された状態で埋葬されていた。1cm～2cm大の骨片で量的にも少ないとから、おそらく被葬者は1体であったと考えられる。從来、古墳への埋葬は屍のままで葬られた例が多く、火葬例は当地方においては極めて少ない。しかし、同じく臼田町において調査した奈良時代に比定される、蛇塚古墳においても同様の火葬骨が出土しており、奈良時代において2例の発見が重なり当時の埋葬風習が何える事例となろう。さらに、蛇塚古墳においては床面上に生木の腐蝕したものが残っており、木櫃の一部である可能性も考えられる。

被葬者は、出土した鉄鎌14、刀子1、鉢帯具4等から想定され得るが、骨片からは細片であるため不可能であった。鉢帯具の節で井出正義氏が詳細に記述していられるのでここでは、井出正義氏が書かれた一部をそのまま記載した。

「入沢五靈西12号古墳出土の鉢帯について言えることは、その出土した鉢の種類が鉈尾を欠くだけで、鉄具、巡方、丸柄2とほぼ一帯分の種類がそろっていること、鉢が比較的大形で、つくりもしっかりしていること等が上げられ。それが古墳の副葬品であるという性格からみて、この鉢の着装者が被葬者で、8世紀代即ち奈良時代の人であり、七位ていどの官位をもつか或はそれに準ず

るような有力者で、入沢に在住した地方豪族であったと推定される。」

このように五靈西12号古墳の被葬者が想定され、19基の古墳群が存在する入沢の地は、かなり重要な拠点としての役割りをない、こうした権勢の在住を成らしめた地域であったと考えられる。

Ⅱ期平安時代における追葬は、遺残していた歯の鑑定により2体～3体であることが判明した。最も骨および歯が多量に残っていた遺骸は30代位の大柄の体格をもつ男性とのことである。第二大臼歯、大三大臼歯の各2本は前者より新しく、2個体あるいは同一個体となる可能性もあり得るとの鑑定結果が出されている。

Ⅱ期における副葬品は、刀子1、内面黒色土師器壺1、土師器高台付壺1と少量であり、特に被葬者の身分を決定でき得るような副葬品ではない。堅穴住居址から出土する一般人の使用していた道具、土器類である。壺は、埋葬時被葬者の枕として用いられる慣習があったと言われている。本古墳の場合も完形で出土していることから、あるいはそうした用途のもとに使用されたことも考えられよう。南佐久郡下における平安時代の遺跡は、小さな沢あい、山麓、日当りの良い山腹等、小さな単位に分散してあらゆる地域に遺跡はその数を増している。律令制の崩壊に起因するものであろう。こうした状況の中で被葬者として想定される人物は、堅穴住居址に住んでいた単位集団の主長クラスの家族を葬ったものと推定される。追葬は9～10世紀平安時代前期にはじまり、最終は中期におよぶまで五靈西12号古墳は使用されていたのである。

(島田 恵子)

次に奈良時代の火葬について触れたい。

大化2(646)年、薄葬令が出された。これは従来の大々的な墓づくりを規定したもので、墓づくりの簡素化を意図した詔である。さらにこれに伴うように仏教が伝来し、墓制に大きな変革が起こりはじめることとなった。法相宗開祖の僧道昭(629～700)がはじめて火葬されたのである。その後、貴族層の間で火葬が普及はじめた。また、僧が葬式に参列して死者の冥福を祈るようになるのも奈良時代から初見される¹⁰。

8世紀に入って法制定された喪葬令の墓条には、「凡そ三位以上、及び別祖氏宗は、並に墓を営むことを得る。以外は合すべからず。墓を営むことを得ると雖も、若し大葬せむと欲はば聽せ」とあり、三位以上は申請して墓を営み、大葬(火葬)の場合は申請はいらない。ことになっている。また、賦役令の赴役身死条は、「本貫に告げよ、若し家人來たり取る者なくば、焼け」とあり、軍防令の行軍兵士条にも、「其の屍は、当初に焼き埋めよ、但し副將軍以上は、將て本土に還せ」とあるように赴役の往復の途中、行軍中の兵士の死亡等について「火葬」を奨励している¹¹。

こうした火葬の法制定のなか、蛇塚古墳・五靈西12号古墳に例が見られるように、地方においても火葬が浸透はじめたことが理解される。そして副葬品には藤手刀(蛇塚古墳)、鈴帶(五靈西12号古墳)等があり、被葬者が重要な地位の人物であることが暗示できるに足りる優品である。こうしたことから今回の火葬骨の発見は貴重な資料であると言えよう。

(佐藤 敏)

- 註(1) 芳賀 登 「葬儀の歴史」 有山閣 1974
- (2) 近江 昌司 「奈良時代官人と仙之内火葬墓——被葬者の問題——」 1983 『奈良県天理市仙之内火葬墓』 埋蔵文化財天理教調査団

引 用 參 考 文 献

- 白田町教育委員会 1986・87 「白田町遺跡詳細分布調査カード」 (報告書は1988年に刊行)
- 小海町教育委員会 1986 「雨堤遺跡」
- 佐久町教育委員会 1979 「佐久町遺跡詳細分布調査」 カード
- 佐久町教育委員会 1987 「後平遺跡」
- 佐久市教育委員会 1975 「家地頭第1号古墳発掘調査報告書」
- 佐久市教育委員会 1981 「舞台場」
- 佐久市埋蔵文化財調査センター 1986 「西裏・竹田峯」
- 望月町教育委員会 1983 「真光寺第1号古墳」
- 長野県史刊行会 1982 「長野県史考古資料編全一巻(二)」
- 長野県史刊行会 1983 「" " 全一巻(三)」
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983 「埼玉県における古墳出土遺物の研究!—鉄鎌について—」『研究紀要』
- 柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会 1987 「鎧帶をめぐる二、三の問題」『埼玉の考古学』
- 埼玉県立歴史資料館考古資料室 1981 「六反田遺跡」「一巡方について—石岡憲雄」
- 大和市教育委員会 1986 「月見野遺跡群・上野遺跡群Ⅰ地点」
- 和歌山県上富田町教育委員会・奈良大学考古学研究室 1985 「山王古墳」
- 鳥取県大山町教育委員会・奈良大学考古学研究室 1982 「向原古墳群」
- 埋蔵文化財天理教調査団 1983 「奈良県天理市仙之内火葬墓」
- 芳賀 登 1974 「葬儀の歴史」
- 森 郁夫 1975 「仏教考古学講座(7)「墳墓」」

あとがき

五瀬西は、私が子供の頃よく遊んだ所であった。石山が盛んな頃には、カッチン、カッチンと石を切る音が遠くまで聞こえて来た。今では此んな事も遠い想い出となってしまった。その頃には、ここに古墳や遺跡があるなどという事はわからなかった。ここに古墳群がある事を知ったのは今から20年位前の事である。急激な開発に伴い地形がどんどん変貌していくなかで、幸いにも五瀬西の地形は私の子供の頃と少しも変わっていない。

入沢古墳はその数31基と言っていた。私は何度も調べたが31基はどうしても見つからなかつた。約半数はヤックラなどを數えているのではないかと思われた。正確な調査をしなければと思ひながらついその機会がなかつた。しかし、昭和61・62年に臼田町教育委員会が実施した、「臼田町遺跡詳細分布調査」による丁寧な調査によりその正確な数が19基であることが判明し、また、今回この古墳群に学術的な調査がなされた。入沢古墳群は、千曲川水系古墳群の南限であり、最終末期の古墳群である。平坦地の古墳群に比べると小形化し、その立地も山麓、山腹に集中している。従つて、私は入沢古墳群は平坦地に築造されて居る古墳に比べて簡略化しているのではないかと考えていた。しかし、調査の結果、實に周到に設計され築造されていることに驚かされた。第Ⅰ期奈良時代の埋葬は火葬であることが判明し、平安時代における追葬も明確に確認された。また、銘帯の出土は中央政権と地方豪族との関係など、今後の研究課題として貴重な資料の提起である。

なお、あの寒い中での調査に当られた調査員の皆さん、前面的にご協力下さった地主の皆さん、地元の皆さんのご援助に厚く御礼申しあげます。また、入沢には多くの古墳・城跡・牧・遺跡等があります。今後、これらを皆さんと共に大切に保護・活用していきたいと思います。

出土した骨・歯等をご多忙中にもかかわらず鑑定し、原稿をお寄せ下さいました、佐久総合病院整形外科医長町田拓也先生・口腔外科医長三沢常美先生、お手配いただきました若月健一氏に厚くお礼申しあげます。

また、報告書作成にあたり南佐久郡誌刊行会に前面的なご協力をいただき記して厚く感謝申しあげます。なお、町農政課、公民館の皆さんには調査期間中多々お世話いただきお礼申しあげます。この報告書が入沢の古代、しいては南佐久郡の古代史を解く一端となることを祈念してご協力いただきました各位のみなさまに衷心より感謝の意を表します。

(団長 三石 延雄)



御靈に祈る



五靈西12号古墳墳丘全景

図版 2



掘り下げ状況（第Ⅱ期）



第II期 床面及び全景

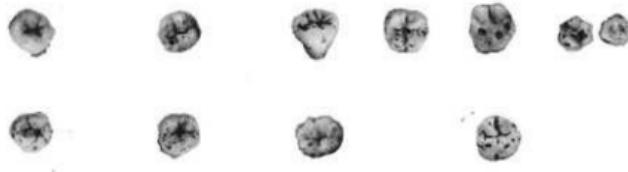
図版4



人骨出土状態



人骨・歯出土状態



第三大臼歯

第二大臼歯

右下第一小白歯～第三大臼歯

図版 6



第Ⅰ期 遺物出土状態



1. 古墳石室内全景



2. 第Ⅰ期玄室床面

図版 8



1.



2.

第一期玄室床面



3. 梁道（東方より）



1. 五箇西12号古墳右侧面全景（西方より）



2. 五箇西12号古墳左侧面全景（東方より）

図版 10



奥壁・側壁・後門等の石の状況

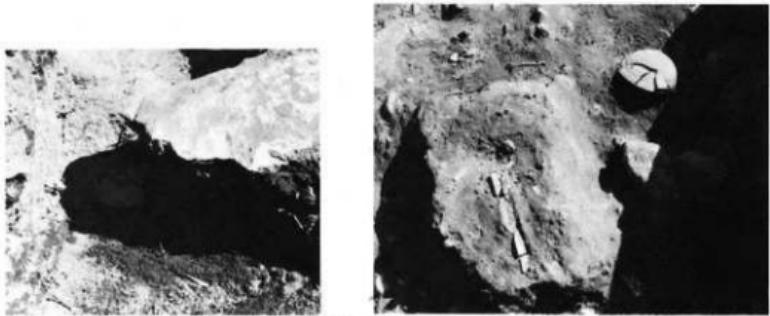


古墳後方からの全景



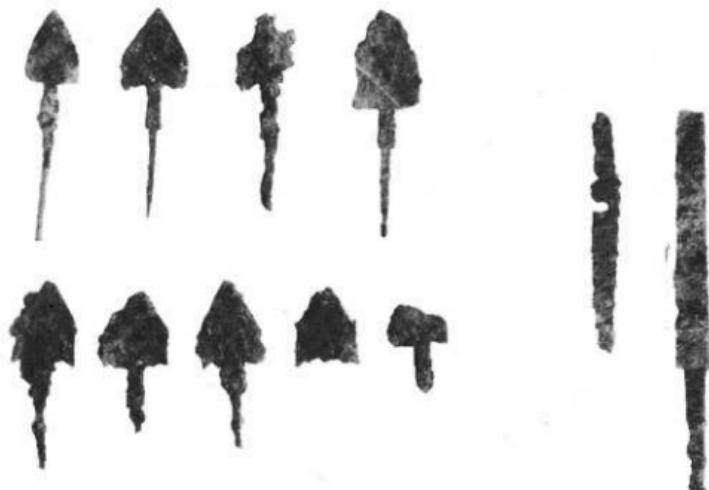


1. 五靈西12号古墳出土須惠器・土師器



2. 第II期遺物出土状態

圖版 12



刀子 (1 : 3)



鐵 繩 (1 : 3)



銅 帶 具 (表)



(裏) (1 : 3)



(1 : 1)

五靈西12號古墳出土鐵繩·刀子·跨帶具



町民の皆さん
の見学会スナップ

五靈西12号古墳

発行日 昭和63年3月20日

編集者 五靈西12号古墳発掘調査団

発行者 白田町教育委員会

印刷所 白田活版株式会社